

平成28年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

平成29年3月

公益社団法人日本写真家協会

1. はじめに

一昨年は山端庸介が撮影した「原爆長崎」の原爆被災状況を捉えた写真を中心に、広島被爆の状況を捉えた松重美人の写真を中国新聞社から、佐々木雄一郎のものは広島平和記念資料館から、菊池俊吉の写真は遺族から提供を受け、「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展を催し、原爆被害の実相を紹介した。反響は大きく「原爆被害の実相を目の当たりにして涙が…」、「70年前のこととは思えないほどシャープな被爆写真ですね」といった感想や、「この写真はみんなに見てもらいたいね」といった声が聞かれ、カメラが記録した衝撃的な瞬間に身を震わせ、原爆の恐怖をかみしめている姿に共感した。写真の記録性が再認識されたことは言うまでもない。昨年の「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」展からは神宮の無垢な荘厳さに魂を奪われた。写真には心を揺り動かすときもあれば、静かに瞑想へと誘う力もある。

日本写真保存センターが収集している写真は、歴史や時代の彩りを伝えるタイプの写真が比較的多い。人間の暮らしや習俗は日々変化している。その変化も時代の姿として記録しておかないと歴史は後世に伝わらない。写真はカメラの眼で記憶する行為であり、人間の過去の記憶は年を重ねるごとに、曖昧になるものである。歴史を伝承するためにも、日本写真保存センターの存在は大きく、その意義を多くの人たちに伝える必要がある。

田沼 武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長）

目 次

1. はじめに	3
2. 本調査の概要	6
2.1. 調査研究テーマ	6
2.2. 調査研究の趣旨	6
2.3. 調査研究の内容	6
2.4. 調査研究計画	6
3. 調査研究の実施計画	7
3.1. 業務題目	7
3.2. 実施期間	7
3.3. 当該年度における業務実施計画	7
4. 業務実施体制	9
4.1. 課題項目別実施期間	9
4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	10
5. 本年度収集・調査した写真原板について	11
5.1. 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数	11
5.2. 本年度収集・調査した写真原板 総論	12
5.3. 調査した写真原板詳細	20
6. 連携調査	28
6.1. 訪問調査	28
6.2. 日本写真保存センターの役割	33

7. 写真原板データベース	34
7.1. 本年度作業概要	34
7.2. 閲覧データベースの一般公開	34
7.3. SAI-CHIによる管理用データベース及び公開用閲覧データベースの構築と公開	35
7.4. 写真保存センターデータベースの今後について	42
8. 情報発信・その他	43
8.1. 情報発信	43
8.2. 「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」展の魅力	45
8.3. 「日本写真保存センター」セミナー	46
8.4. Webサイトのリニューアル	49
8.5. 「文化財写真フィルム」(岩波書店所管)の寄託	50
9. 支援組織	51
9.1. 「日本写真保存センター」と支援組織	51
9.2. 支援組織の経緯	51
9.3. 支援組織のサポート内容	52
9.4. 支援組織の概要	53
10. まとめ	54
図 版	55～60

2. 本調査の概要

2.1. 調査研究テーマ

わが国の文化的、歴史的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）が散逸、遺棄されつつある現状を防ぐため、昨年度に引き続き本年度も写真原板の収集保存を図り、学術、情報、教育機関並びに博物館・美術館、郷土資料館と一般の方々が利活用するための写真原板アーカイブの構築を行うための基本的な調査研究を行う。

2.2. 調査研究の趣旨

わが国の近現代を撮影した写真原板を収集し、劣化の予防と長期保存のための処置を施して収蔵し、利活用を図る。

2.3. 調査研究の内容

現状を把握し、保存・活用に当たっての課題を明らかにするため、以下について調査研究を行い、今後の方策を検討する。

2.4. 調査研究計画

① 諮問調査委員会議の実施

調査研究を行うにあたり、写真史、保存科学、権利処理、利活用、アーカイブに関わる専門家による諮問調査委員会議を実施し、当センターの基本理念、具体的な活動方針を諮るための会議を開催する。なお、データベースの構築および保存科学については、専門家による分科会を設け作業を進める。

② 諮問調査委員会の設置と写真原板の収集保存

諮問調査委員会を立ち上げ、関係者の元を訪ねて写真原板の収集を図る。時代を色濃く記録した数々の写真原板（フィルム、乾板、湿板等）を対象に当初は戦後期の10万点、最終的には100万点を収集保存の目標とする。写真原板を物故写真家の遺族並びに所蔵機関、関係者から収集し、画像データの取得を図るとともに撮影情報の分析を行いデータベースの構築を図る。

③ 写真原板の収集基準と保存方法

激動した時代を記録した写真原板を中心に収集する。データベースを構築するために写真原板はなるべく、写真集や印刷物等で公表されたものを優先する。次いで戦前、1980年以降のものへと範囲を広げ近現代史を彩る人物や事象を捉えたものへと収集を拡大する。

④ 写真原板の利活用

データベースの利活用に当たっては、著作権に関する権利処理を行い、近年とみに課題となっている対象物の肖像権や更には写真原板の所有権などの権利についても研究を進め、公正な利活用の指針を構築する。

松本 徳彦（公益社団法人 日本写真家協会副会長）

3. 調査研究の実施計画

3.1. 業務題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む)

3.2. 実施期間

平成28年4月契約締結日から平成29年3月31日まで。

3.3. 当該年度における業務実施計画

(1) 写真原板の収集調査

写真原板の収集は、昨年度から引き続き1945年から1970年代のもの、戦前及び1980年以降の時代を克明に記録した歴史的文化的に貴重な写真原板(フィルム及び乾板等)を対象とする。これらを撮影した写真家の多くは既に物故されているため、遺族(著作権継承者等)および公文書館、図書館、郷土資料館、新聞社、出版社等の関係者から収集を図っている。

(2) 写真原板の劣化

わが国の気象条件は写真原板の長期保存には適していない環境であることはすでに知られている。遺族等のもとから収集した写真原板は、チリや埃をクリーニングし、フィルムの劣化(ビネガーシンドローム)の有無を検査試片(A-Dストリップ)を使って調べ、A-Dストリップレベル0.5以下の写真原板を、長期保存用の中性紙の包材に交換して収蔵している。

A-Dストリップレベル0.5を超えるものは乾燥した空気のもとで酢酸を飛ばし、保存するかどうかの判定を行う。

(3) 原則寄贈から寄託へと収集範囲を拡大

写真保存センターが収集する写真原板は、原則寄贈としているが、遺族によっては寄託を望む声もあるところから、重要写真原板については寄託もやむなしとして受け入れている。しかし、なるべく数年で寄贈に切り替えられるよう要請している。

(4) 写真原板の密着(コンタクトプリント)

収蔵する前に写真原板は撮影対象が何であるかが判るように、35ミリフィルムでは36枚を1単位として、密着(コンタクトプリント)をスキャンして、内容の確認を行っている。密着からは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見、どんな感動を覚えたかの印象を掴むことができ、作者研究や作品の制作過程を研究するためには必要な作業である。アーカイブでは密着は原則非公開であるが、特別な研究者等には写真保存センター内で閲覧できるようにしている。

(5) アーカイブ構築に向けてのデータベース

平成26年度から整備を進めているデータベースシステム「SAI-CHI」について、収集している写真原板のデータベースの基本は管理用データベース(写真原板台帳)で、これを元に公開、閲覧用のデータベースを構築し、Web上での閲覧、検索が行えるようにしている。昨年度実証実験を行い、閲覧、利用の利便性など課題として指摘のあった部分の改良を終え、閲覧用データベースを完成させた。現在閲覧できる画像数は約3,700点である。

(6) 写真原板の利用と広報

一昨年は原爆投下70周年ということもあって被爆直後(1945年8月10日)の長崎を撮影した山端庸介の写真原板を中心とした写真展「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」を催し、写真の「記録の重み」を実感していただいた。写真の記録性、訴求力の強さが伝わり、写真原板の長期保存の必要性が認識された。今年度は文化功労者の渡辺義雄が撮影した写真原板から「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」展を東京と大阪で催し、写真原板を保存している「日本写真保存センター」への関心と原板の保存を期待する多くの声が聞かれた。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

4. 業務実施体制

4.1. 課題項目別実施期間

	事 項	内 容	備 考
4月	諮問調査委員会議①	平成28年度年間計画	
	支援組織会議①	平成27年度経過報告・平成28年度年間計画	
	データベース会議①	平成28年度計画(凸版印刷)	
5月	調査委員会(データベース)	訪問調査 (芳賀ライブラリー、日本近代文学館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)	東京
	データベース会議②	平成28年度作業詳細(凸版印刷)	
	調査委員会(広報)	Webサイトリニューアル	
6月	調査委員会(調査)	(若目田幸平、佐藤元洋、岡村崔)	東京、静岡
	調査委員会(データベース)	訪問調査(宮本常一記念館、広島平和記念資料館)	山口、広島
	写真原板の収蔵作業①	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	データベース会議③	データ移行打ち合わせ(凸版印刷)	
7月	調査委員会(調査)	(若目田幸平、野水正朔)	東京、兵庫
	調査委員会(収集)	(野水正朔、岡村崔)	
	調査委員会(広報)	「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」京都展	京都
8月	調査委員会(収集)	(渡辺義雄、若目田幸平、岩宮武二)	東京
	調査委員会(権利処理)	渡辺義雄他『六大寺大観』関係写真原板利活用について(岩波書店)	東京
	調査委員会(権利処理)	渡辺義雄写真原板利活用について (国立近現代建築資料館、国立西洋美術館、東京文化会館、松隈洋)	東京
9月	調査委員会(データベース)	大容量ストレージ(NAS)導入	
10月	諮問調査委員会議②	平成28年度上半期報告・下半期の計画	
	支援組織会議②	平成28年度上半期報告・下半期の計画	
	調査委員会(広報)	「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」東京展	東京
	調査委員会(権利処理)	渡辺義雄写真原板利活用について (国立近現代建築資料館、国立西洋美術館、東京文化会館、松隈洋)	
11月	写真原板の収蔵作業②	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	調査委員会(広報)	「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」大阪展、 セミナー「渡辺義雄からのメッセージ ～フィルム保存の重要性～」	大阪
12月	調査委員会(保存)	劣化写真原板保存実験協力(山口孝子委員、IMAGICA)	東京
	調査委員会(データベース)	閲覧用データベース一般公開	
1月	諮問調査委員会議③	平成28年度報告・新年度計画	
	調査委員会(保存)	劣化写真原板保存実験協力(山口孝子委員、IMAGICA)	東京
	調査委員会(調査)	(菊池俊吉)	
	調査委員会(権利処理)	渡辺義雄写真原板利活用について (国立近現代建築資料館、国立西洋美術館、東京文化会館、松隈洋)	東京
	調査委員会(収集)	(山崎治雄、緑川洋一)	岡山
	調査委員会(データベース)	データベース連携方針打ち合わせ(丸川雄三委員、凸版印刷)	
	調査委員会(権利処理)	渡辺義雄他『六大寺大観』関係写真原板利活用について(岩波書店)	
2月	調査委員会(権利処理)	吉岡専造写真原板利活用について(朝日新聞社)	
	調査委員会(広報)	page2017オープンイベント「時代を記録した写真原板に光を! 眠っていた写真フィルムを、目覚めさせ、活用しよう」	東京
3月	写真原板の収蔵作業③	相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵	神奈川
	報告書作成	平成28年度事業報告	

4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施体制

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)

熊切 圭介(公益社団法人日本写真家協会会長)

松本 徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)

瀬尾 太一(一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

諮問・調査委員会

諮問・調査部門

委 員 北村 行夫(虎ノ門総合法律事務所 弁護士)

委 員 金子 隆一(写真史家)

委 員 田良島 哲(東京国立博物館博物館情報課長)

委 員 高橋 則英(日本大学芸術学部教授写真学科主任)

委 員 吉田 成(東京工芸大学芸術学部教授写真学科主任・同大学院芸術学研究科長)

委 員 白山 眞理(一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長)

委 員 多田 亜生(編集者)

委 員 大亀 哲郎(日本ユニ著作権センター企画室主任研究員)

委 員 山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)

委 員 丸川 雄三(国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授)

補助員 和田 直樹(公益社団法人日本写真家協会理事)

補助員 小池 汪(公益社団法人日本写真家協会会員)

補助員 内堀 タケシ(公益社団法人日本写真家協会会員)

補助員 辻 徹(公益社団法人日本写真家協会会員)

調査作業部門

調査員 中川 裕美(学芸員 日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)

調査員 笛木 諭(東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻博士前期課程修了)

調査員 河原 健一郎(日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)

調査員 渡邊 英雄(写真研究者)

調査作業員 名阪 沙也子(スキヤニング担当)

事務局長 池田 雄二

5. 本年度収集・調査した写真原板について

5.1. 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数

5.1.1. 写真原板資料受入概要

本年度は写真家8名、約11,000本の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。なお、佐藤元洋の写真原板資料は昨年度の3月に受け入れたが昨年度の報告書へ掲載が間に合わなかった為今年度の報告書に掲載した。各原板の詳細は5.3.で紹介する。

表1 平成28年度写真原板資料受入概要

撮影者名	受入日	受入数		内容
		初期調査未 本数	初期調査済 本数	
佐藤元洋	平成28年3月8日	—	600	1969年太陽賞受賞作品関係
渡辺義雄	5月15日 8月3日	—	400	「伊勢」、「帝国ホテル」、 昭和20・21・37年の日本、他
岡村崔	7月4日	—	4,700	絵画、彫刻、建築 (ルネサンス～バロックの西洋美術)
野水正朔	7月25日	—	200	『淡國写真帖』関係
若目田幸平	8月25日	—	4,200	『東京のちょっと昔』関係
岩宮武二	8月31日	—	200	『佐渡』関係
山崎治雄	平成29年1月30日	500	—	旭川ダム(岡山県)建設工事記録
緑川洋一	1月31日	200	—	『日本百景』、『白い村』関係
合計8名		700	10,300	

5.1.2. 相模原フィルム保存庫入庫内容

本年度の相模原フィルム保存庫への入庫作業は2016年6月16日、11月17日、2017年3月16日の3回行い、計5,263本の写真原板を収めた。写真原板の入庫内容を表2に記す。

表2 平成28年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数	入庫方法
中村由信	97	A
朝倉隆	1,825	B
ブリストル、ホレス	750	A
旧写真協会	774	A
永田一脩	303	A
緑川洋一	279	A
木村伊兵衛	193	A
佐藤元洋	607	B
野水正朔	205	A
岩宮武二	230	A
合計10名	5,263	—

表2の入庫方法については以下の通り。

A=中性紙製の蛇腹式ホルダーやタトゥに収め、

ストレージボックスに入れ替え。

B=グラシン紙製のレフィルに収め、中性紙製の段ボールと
プラスチックでつくられたリングファイルに入れ替え。

5.1.3. 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで60名、約216,315本の写真原板資料を受け入れた。そのうち相模原フィルム保存庫へ収めた写真原板は60,692本。未処理の写真原板は155,623本。年度別の各作業処理数は表3の通り。また、調査を開始してから現在までデジタル化した写真原板の数は31,160本になった。

表3 年度別各作業処理数 (2017年3月17日現在)

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	未処理数
平成21年度	28,712	—	28,712
平成22年度	25,626	—	54,338
平成23年度	41,203	—	95,541
平成24年度	4,470	8,901	91,110
平成25年度	3,523	15,139	79,494
平成26年度	40,258	24,179	95,573
平成27年度	61,523	7,210	149,886
平成28年度	11,000	5,263	155,623
合計	216,315	60,692	155,623

笛木 諭 (調査員)

5.2. 本年度収集・調査した写真原板 総論

敗戦直後から村人の日常を捉えてきた野水正朔(1932年～)は、経済成長とともに村から人々が都会に向けて働き口を求めて島を船出する情景や農村も機械化が進む様相など、地方での暮らしの変化を記録した文化史的な写真群である。なかでも淡路島の人形浄瑠璃の写真は極めて貴重なものがある。

1970年代、庶民の住む東京墨田区京島界限の下町風情をきめ細かく捉えた若目田幸平(1933年～)の写真には、人情味あふれる庶民の日常が記録されている。早朝から働く豆腐屋の主人が、昼過ぎから下町で知り合った人たちと談笑しながら界限を歩き回りスナップする。人間味のある情景を捉えている。家々の構造から人物の服装、女性の髪形、子供たちの駄菓子買いと郷愁を呼ぶショットに、アマチュアならではの好奇心に満ちた写真が、いまは貴重な文化資産となっている。

戦後日本の関西における写真活動の中心的なリーダーに岩宮武二(1920～1989年)がいた。岩宮は大正9年鳥取県米子市で生まれる。家業の倒産で進学の道を断たれ、大阪の阪急百貨店で働くことになった。戦後は三宮でDPE店を営みながら、神戸の焼け跡にレンズを向けカメラ誌に投稿を繰り返した。デビュー作「マヌカン」が富士フォトコンテストで金賞を射止め一躍有名に。その後厳冬の『佐渡』(1962年)に渡り、昔ながらの生活が残る庶民生活を活写する。苦労の末のデビュー、京都や奈良の庭園やものの形に日本的な美を見出した。端正な表現に国際的な関心が集まる。『宮廷の庭』(1968年)、『日本海』(1972年)、『かたち:日本の伝承』(1962年)などを次々と出版。中東から南アジアへと題材を広げ、ユネスコの支援を得て世界遺産の『ボルブドゥール』(1990年)の撮影を依頼されるなど「仏像のイメージ」を追求する。大阪芸術大学の写真学科創設に関わり、若い写真家の育成に努めた。

朝日新聞社出版写真部長として活躍した吉岡専造(1916～2005年)は、1940年から2年間従軍写真家として活動。戦後は朝日新聞社の出版関係の仕事で活躍。なかでも『アサヒカメラ』誌の連載「現代の感情」での作品は秀逸で、1957年3月号の「鳩山退場」は政治家を捉えた写真で歴史に残る名作と言われる。岸信介以下田中角栄に至る歴代の首相が居並ぶ中を秘書に支えられて退場する写真は歴史そのものを記録している。2014年度と2015年度に遺族から朝日在勤中のものを含む2,500本以上の写真原板を収集した。写真集に子息の誕生を記録した『人間零歳』(1960年)と、退職後、吉田首相に乞われて私生活までを撮影した写真集『吉田茂』(1967年)を出版、『素顔の昭和天皇』(1996年)などは吉岡の温厚な人柄が滲み出た作品である。

5.2.1. 「渡辺義雄」の写真原板

建築写真で著名な渡辺の写真原板は、撮影目的上5×7・4×5インチのシートフィルムが主として使われていた。その数量は約24,000枚にも及ぶ。代表的なものは3回の遷宮を撮った「伊勢神宮」や「奈良六大寺」、「大和古寺」、「迎賓館」、「新宮殿」、「旧帝国ホテル」、「日本の塔」、「出雲大社」など建築史上貴重な建造物のほとんどを網羅している。また、戦後の建造物では前川國男などの代表作も多数含まれている。

戦前の写真原板は東京大空襲ですべてを焼失し、戦後間もなくは小型カメラで焦土と化した都心部や敗戦直後の混乱した状況をスナップしている。国交が正常化して間もないアジアの国々やソ連邦、イタリアなど国際交流の先駆けとなる写真も収集することができた。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

5.2.2. 渡辺義雄 原板受入れ 中間報告 ー渡辺義雄と伊勢ー

渡辺義雄受入れ原板の概要

渡辺義雄のご遺族から写真原板総数、約24,000枚(関連資料含む)が日本写真保存センターに寄贈された。当センターではそれらを2013年から2016年にかけて6回に分けて収集している。

写真原板の状態は、撮影後30～60年経過したものであり、古い原板には銀鏡や褪色が発生し、桐たんすに保管されたものは酢酸臭が出ていた。全体的には、スキャニングやプリントが可能なレベルで、概ね良い状態と判断する。

受け入れた撮影対象として、特にイタリア・モスクワ、伊勢、奈良六大寺関連の写真原板に価値の高いものが多い。

表1 受入れ写真原板の撮影対象

	撮影対象	構成比
1	イタリア・モスクワ	4%
2	伊勢	12%
3	京都	6%
4	奈良六大寺	12%
5	宮殿	13%
5	迎賓館	8%
7	大和古寺	10%
8	帝国ホテル	3%
9	茶室	2%
10	日本の塔	14%
11	その他	16%
合 計	約 24,000枚	100%

イタリア・モスクワの写真原板は、既に本調査・スキャン済みであり、また奈良六大寺関連は追加受け入れが期待されている。現在優先して進めているのは伊勢神宮の遷宮を40年に渡って撮られた原板でこれは質・量ともに優れている。

受入処理の現状

渡辺義雄の写真原板は、ダンボール箱で25箱と桐たんす3棹に収納された状態で受け入れをし、その数量把握と状況確認を2016年夏までに仮調査として進め、総数24,000枚と把握された。

伊勢の原板については、2016年夏頃から本調査(個別原板のデータ入力)・長期保存用の中性紙の包材交換を開始し、2017年1月末で伊勢関連原板の本調査・包材換えを終了した。総数は約3,000枚であった(伊勢路を含む)。

平行して伊勢の写真集掲載の写真原板の照合作業を進めているが、その掲載された写真原板は81個の小箱(仮箱)に分かれて収められており、相当な量の写真原板から人力で(原板を目視で)作業を行う為、現状では約15%が照合出来ている状況である。また重要原板に対しては先行してスキャンを進め、620枚は完了している(伊勢のスキャン対象は1,500枚を予定)。

渡辺義雄と伊勢

渡辺義雄は1953年に国際文化振興会^{*1}の海外向け広報誌の仕事として、その編集をしていた建築家の堀口捨巳より建築物の写真撮影依頼があった。その一つとして伊勢神宮の遷宮に合わせてこれまで写真撮影が許されなかった伊勢神宮の四重の垣内^{*2}の正殿(内宮・外宮)の撮影の企画が提案された。神域の撮影ということで関係者の反対に遭いながらも、遷宮前の新築の建物であればということでは何とか撮影が許可された。これをきっかけとして、1973年、1993年の遷宮に合わせて通常ではカメラが入れない神域の撮影をしている。3回の撮影が許可されたのは、伊勢神宮と渡辺義雄との信頼関係がしっかりと出来上がり、良質の写真の作成、写真の使用に関してもその都度伊勢神宮に確認し、伊勢神宮の意向を尊重したことによる。渡辺義雄は、3回の遷宮時(第59回・第60回・第61回)に垣内の建物をカメラに収めた唯一人の写真家であり、このことから代表作が伊勢神宮となるのは誰でもが認めるところである。

渡辺義雄の伊勢神宮について、同時代の評論家にして知己たる伊奈信男は

「その美の成立条件を深く洞察し、これを的確な写真技法によって表現し、精緻にして典雅、美的格調高い建築写真たらしめている。これらの一連の作品の中でも、特に『伊勢神宮』がすぐれている。わが国の寺社には、自然との調和を重視するものが多いが、ここでは特にその環境描写がすぐれており、建築物の神秘的ともいえるべき均整と統一の美や、高貴なる単純性の表現と相まって、神と美の『殿堂』としての大いなる空間が、写真的に力強く啓示されているのである」(『写真・昭和五十年史』 朝日新聞社 1978年)

と評している。

伊勢原板の数量・種類

伊勢の写真原板数は約3,000枚あり、遷宮を3回撮影したものである。この写真原板の構成は、モノクロ:35% カラー:65%(ポジ95%・ネガ5%)。フィルムサイズは大判:95%(5×7・4×5)それ以外:5%(120・135・他)である。年度別に使用したフィルムは、1953年はモノクロ(コダックを使用)、1973年はモノクロとカラー、1993年はカラーと大きく分けることが出来る。1993年は富士のカラーフィルムを使用し、発色の良い仕上がりととなった。渡辺義雄は通常は大判カメラを使い、スナップ、空撮、行事等の手持ち撮影する場合に中判(120)・35mm判(135)のカメラを使用している。また印刷の貸し出し用としてデュープを作成していて、それは全体の10%程度となる。

撮影機材と撮影の流儀

伊勢の撮影に臨む時の機材そしてその撮影流儀について、渡辺義雄の伊勢神宮の撮影アシスタントを2度務めた山下圭一氏に伺ってみた。

伊勢の撮影は、1953年は助手と2人で、1973年/1993年は概ね5人の撮影クルーで構成され、機材はカメラと三脚以外に「レンズ用の箱」と「フィルム用の箱」2つを持って移動した。

1953年のカメラは暗箱、レンズは3〜4本ほど、フィルムはコダック5×7モノクロフィルムを使用。このコダックフィルムのサイズと国産のフィルムバックの大きさが数ミリ合わないことが現場で判明し、宿舎にてフィルムを剃刀で数ミリ削ることになる事態が発生した。「最初の印象が大切」といわれるように、この1953年の撮影の完成度が高く、これを超える撮影は1973年/1993年でも難しかった。

1973年/1993年のカメラはジナーSとリンホフ、レンズは、48mm、65mmアンギュロン、75mmフジノン、90mmアンギュロン、120mmジンマー、150mmフジノン、180mmジンマー、210mm、240mmテレアートンと9本程、1973年のフィルムはモノクロでは富士のパックフィルム・カラーはコダックを主に使用、1993年は富士のカラーを主に使用。

カメラは、三脚にセットする段階でまず対象に対して水平垂直をきっちりと出し、状況によってはシフト操作をしているが、ティルト操作は殆ど使っていない。露出計はドイツ製のゴッセン反射露出計を使用していた。

露出は、絞りをF32にセットし深い被写界深度を出し、シャッタースピードは1/8秒を選択してじっくりと露光させている。カラーの撮影では、露出を半段下げて控えカットをおさえていた。フィルターは、モノクロではオレンジを装着、65mmでは周辺部が落ちるため補正のフィルターがあった、カラーでは基本的にフィルターの使用は無い。

持参したレンズにはイメージサークルが小さい広角系レンズがあり、このレンズの使用時には、フィルム上部にケラレが生じている。この小さなレンズを見た、1993年の別な撮影クルーの写真家石元泰博はそれで本当に写るのと聞いてきたとのことである。

渡辺義雄の身長は162cmでその高さに合わせて三脚をセットし、その視点で撮影をしている。また四重の垣の外から正殿側面を狙う為に、特注3m高の組立てアルミ三脚を用意し高い視点からの撮影する工夫もしていた。

遷宮前の新しい建物がある垣内に入ると、真新しい桧の匂いが充満した荘厳な空気となり、雑念が消え神聖な気持ちになる。渡辺義雄は垣内に入った瞬間から神と一体となり、神の視点を持って撮影を行った。渡辺義雄は光を読み最適な瞬間を逃す事無く、スピードが必要な時は手早く、時を待つ必要がある場合はじっと待つことを厭わなかった。たとえば内宮屋根の左側の千木に夕日が入り金属のように表面が光る一瞬がある。太陽の位置、時間そしてカメラを据える場所、それらの条件が合った時だけシャッターチャンスとして現れ写真となる。それは渡辺義雄だけが読み切った神なる業である(図1 内宮正殿の棟)。



図1 内宮正殿の棟

雲については情緒的になるので時間をかけてでも去るのを待ったが、1993年では台風が来ていて雲が写ることも致し方なしとして撮影をした。

撮影年別の傾向と特徴

渡辺義雄の伊勢神宮を20年ごとに撮影した特徴を簡潔に表すと、1953年は「驚嘆」、1973年は「精力的」、1993年は「集大成」ということができると思う。伊勢神宮の垣内の撮影は、天候状況にも影響され毎回8月末から9月上旬間の3日程度である。たとえば1953年は内宮では半日が2回、外宮では夕方に1回と極めて短い時間しか撮影を許可されていない。

時間や天候の制約がある中でも、渡辺義雄は写真を撮るにあたり、「待ち」(雲待ち・光/影待ち)をし、「間」(主体と周辺の間、光と影の間)を取り、「呼吸」(自然とまた神なるものと呼吸)を合わせ、邪魔になるものを全て排除し、伊勢神宮の建物が最も美しく見える時に、その瞬間を逃さずに静かにシャッターを切っていった。

1953年は、雲を避け、光と影の関係を読み、白木の被写体を無駄なものを排除して撮影した。初めて垣内に入った写真家の驚き・興奮が写真を通して感じられる強い印象の写真となっている。

1973年は、渡辺義雄以外に3組の撮影クルーが同時に入り撮影を行った。渡辺義雄は66歳で写真家として意欲的に仕事をこなしていた時期であり、二度目の撮影として手堅くつばを押さえた撮影となった。物量的に豊かな時代になり、大量のフィルムを使い同じ構図のカラー、モノクロを同時に撮影することもあった。正殿で言えば、全景、正面、側面、背面、千木、堅魚木^{※3}、居玉^{※4}、木階^{※5}、飾り金具など全てを撮影対象物として写した。この時、初めてカラーフィルムにて正殿が写し、初秋の強い日差しが白石に反射し正殿が光り輝く様が、品良く収められた。

1993年は5組の撮影クルーが入った。渡辺義雄は高齢(86歳)になり腰痛で撮影には厳しい状況で臨んだ。年齢も考えると3回の遷宮の集大成として、慣れたフィールドで構図を決め、時を待った。これまで雲は情緒観が有ると避けてきたが、雲を入れた構図やカラーでの色彩感豊かな正殿の撮影をしている。この時は、台風が接近していて、雲が避けることが出来ない状況になったことも一つの理由の様だ。

伊勢を撮影した約3,000枚の原板数を年度別で見ると(現状1,000枚の撮影年が不明でありそれ以外の概算では)、1953年が4%、1973年が60%、1993年が10%、また伊勢路は1978年の26%となる。また、撮影原板には正殿を取り壊した後の古殿地、春の桜、秋の紅葉、季節行事などのものもあり、渡辺義雄は遷宮の時だけでなく、度々伊勢に足を運び周辺の撮影や調査をしている。

伊勢の成果物(写真集等)

伊勢関連の主な書籍

主な書名	発行年	発行所	掲載写真撮影年
Architectural Beauty In Japan *	1955	国際文化振興会	1953
Tradition Of Japanese Garden *	1962	国際文化振興会	1953
伊勢 ―日本建築の原形―	1962	朝日新聞社	1953
日本のやしろ 伊勢	1963	美術出版社	1953
日本の美術3 伊勢と出雲	1964	平凡社	1953
伊勢神宮	1973	平凡社	1953、1973
平凡社ギャラリー 8 伊勢神宮	1973	平凡社	1953、1973
日本の美 現代日本写真全集第12巻 神宮と伊勢路	1979	集英社	1973、1978
世界の聖域11 伊勢・出雲	1980	講談社	1953、1973
日本名建築写真選集第14巻 伊勢神宮・出雲大社	1993	新潮社	1953、1973
渡辺義雄の眼 伊勢神宮	1994	講談社	1953、1973、1993

*は、pp.5~6掲載

写真集は写真家の重要な成果物として捉えられる。渡辺義雄の伊勢神宮の写真を掲載した印刷物は、写真集が3冊(『伊勢 一日本建築の原形一』1962年、『伊勢神宮』1973年、『渡辺義雄の眼 伊勢神宮』1994年)であり、出雲^{※6}や伊勢路等との併載された出版物としての関連書籍6冊、もともとの撮影動機となった海外広報誌への掲載2冊が上げられ、また伊勢の写真は月刊誌やその他の多くの印刷媒体に掲載されている。

原板と印刷物から分かること

1962年に出版された『伊勢 一日本建築の原形一』は、1953年に撮影された写真原板が9年目にして日の目を見たもので、大胆なトリミングで迫力ある紙面を構成している。極端なものでは、写真原板の1/5ほどを切り取って使うページもあり、それはこの本の著者の一人である丹下健三の編集意図によるところである。以下の図2・図3にある内宮正殿正面床下の柱は、写真原板では内宮正殿を正面から画面いっぱいに入れ撮影している。それを正殿の下部の柱構造だけを見せる意図でトリミングされている。

写真原板に見る、トリミング指示と印刷物の掲載例



図2 トリミング前の写真原板(1953年撮影)とトリミング指示



図3 『伊勢 一日本建築の原形一』(1962年) p.166 内宮正殿正面の木階と板扉

1973年発行の『伊勢神宮』には、1962年の『伊勢 一日本建築の原形一』に使われなかった1953年撮影の写真原板が多数使われ、全体の半分がそのモノクロ写真で構成されている。また、初めてのカラーでの伊勢神宮が紹介されており、トリミングを抑えた写真の全画像を見せる一般的な写真集となっている。

1994年の『渡辺義雄の眼 伊勢神宮』では、モノクロは1953年撮影、カラーは1973年撮影と1993年撮影のものを上手く配し伊勢神宮の集大成版として仕上げている。1993年撮影のものはカラーで雲がある色彩豊かなものとなっている。これも極端なトリミングは殆ど見受けられない。

渡辺義雄の伊勢神宮の撮影は、撮影コーディネーターやディレクターなど付かず、個人の写真家として自らの判断で構図を定め撮影を進めた様である。その証として1953年の伊勢神宮の撮影に際し渡辺義雄は、

堀口先生に本に使われる必要な箇所を聞いたら、瑞垣内の全景、正殿斜め後方から、正殿背面(北)、宝殿妻側正面と御饌殿との注文があり、撮影は自由にやってほしいとのことであり、責任の重大さを痛感した。(『伊勢神宮』講談社1973年)

とあり建築写真を知り尽くした、渡辺義雄だからこそ出来た、伊勢神宮の撮影である。

伊勢写真原板保存の意義

伊勢神宮は1,300年以上前から、途中で何回かの欠落はあるものの、20年ごと新しい正殿を建て遷宮をしている。1953年に初めて垣内にカメラが入りその姿を世に伝えることになった。その初めて写真に現したその姿は、節のない木材を使い正殿を作った様子が見える。その後の遷宮では、徐々に木材調達の難しさからか節の数が増えた木材が使用された姿を見ることが出来る。1953年の写真原板は垣内を記録した最初の写真として、今後も原点として参照されるものになると考える。

写真に見る、遷宮毎の使用木材の「節」の増加



図4 内宮正殿北面全景 (1953年撮影)



図5
内宮正殿北面左側の拡大
(1973年撮影)



図6
内宮正殿北面左側の拡大
(1993年撮影)

今後の展開

伊勢神宮は、悠久の歴史の中で、営々と遷宮を重ねて「常若」の姿を維持し、今後とも日本の文化を伝える重要な場所であり続けるであろう。西行法師は伊勢神宮に関して「何事のおはしますかはしらねども かたじけなさになみだこぼる」と読んでいる。この伊勢神宮の何事のおわす姿を、写真に捉え世に伝えた渡辺義雄の偉業は、昭和・平成の世だけでなく、長く日本の貴重な遺産として位置付け残して行くべきものとする。

渡辺義雄の膨大な写真原板は、どれもが歴史的な価値が高く、超長期の保存が望まれる。受入処理にあたって時間がかかる作業となるが、後世に残す貴重な遺産として取り組みを進めたい。一方で丁寧な作業には時間がかかり作業効率が低下するという問題もあり、そのバランスを適切に取るようにして進めていきたい。

-
- ※1 国際文化振興会：国際文化振興会は1934年に設立され日本の文化を海外に紹介する活動を数多く手掛けた団体。この振興会が戦後初めて手掛けたのがこの伊勢神宮の写真を含む日本の建築美を紹介するものであった。
 - ※2 四重の垣内： 正殿は四つの垣（塀）で囲われ、神の領域として外部からの侵入を閉ざしている。遷宮の前の、未だご神体に移られる前の建物の時だけが、撮影が許される場であり、その機会は20年に一回だけとなる。
 - ※3 千木、堅魚木： 正殿及び宝殿などの屋根に据えてある木製の部材。千木は屋根両端にあり細い板が交差したもの。堅魚木は上下を絞った円柱を横にした形で屋根の中央部に何本か配置して有るもの。
 - ※4 居玉： 正殿の高欄に付けてある5色の装飾玉。
 - ※5 木階： 正殿正面の10段の階段。
 - ※6 出雲： 出雲は伊勢とほぼ同時代に建立され日本書紀や古事記に記述がある古来より続く大社である。大社作りの神殿に大国主命を祀り、定期的に建て替えをして今日に至っている。神無月には全国の神様が出雲に集まり会議をするといわれている。

参考文献

- ・『伊勢ー日本建築の原形ー』 丹下健三／川添登／渡辺義雄 1962年 朝日新聞社
- ・『伊勢神宮』 渡辺義雄 1973年 平凡社
- ・『日本の美 現代日本写真全集全十二巻 第十二巻 神宮と伊勢路』 渡辺義雄 1979年 集英社
- ・『渡辺義雄の眼 伊勢神宮』 渡辺義雄 1994年 講談社

渡邊 英雄 (調査員)

5.3. 調査した写真原板詳細

5.3.1. 本年度受入れ写真家と写真原板の特徴

^{さとうもとひろ}
佐藤元洋 1948(昭和23)年 - 1991(平成3)年 東京生まれ。

1966年、日本大学芸術学部写真学科入学。1968年、ベ平連などの市民デモや学生運動に参加し、撮影取材を行う。1970年、写真映像批評ミニコミ誌『COPÉ』を自費出版。フリーカメラマンとして活動。

主な写真集：『こんにちは70年』(自費出版 1969年)、『びんせん写真集』(自費出版 1980年)

主な写真展：「佐藤元洋写真展」(ギャラリー Mole 1995年)

主な受賞： 第6回太陽賞(1969年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年3月8日、135判モノクロネガを中心に、671点を受け入れた。

○原板の内容

1960年代後半～1980年代前半までの、デモなどの社会運動をとらえたものである。1969年の太陽賞受賞作品や、写真集『こんにちは70年』に使用された原板の他に、氏が刊行していたミニコミ誌『COPÉ』に掲載されたと推測される原板が含まれる。

○原板の状態

一部に酢酸臭やカーリングが見られる。ほぼ全ての原板に、撮影年月日、撮影場所の記入があるため、写真集に使用された原板の特定は比較的容易である。現在、1969年太陽賞受賞作品と、原板との照合を行っている。



図7 佐藤元洋 1969年太陽賞受賞作品「反戦運動'68」より

のみずまさあき

野水正朔 1932(昭和7)年 - 兵庫生まれ。

郵便局員のかたわら、1952年ごろから淡路島の風景を撮り始める。1955年、淡光会設立会員となる。1969年、淡路美術協会写真の部設立会員となる。2003年、日本写真作家協会会員となる。

主な写真集：『淡國写真帖』(淡国書房 1994年)、『新淡國写真帖』(教育出版センター 2007年)

主な受賞： 兵庫県「ともしびの賞」(1992年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年7月25日に、計205点を受け入れた。内訳は、135判モノクロネガ201点、120判モノクロネガ4点であった。

○原板の内容

1950年代後半～1960年代にかけて淡路島で撮影され、写真集『淡國写真帖』に使用された原板およびその周辺のものである。

○原板の状態

紙箱の中に3つの封筒があり、それぞれに原板が収納されていた。封筒には各々「写真集ケイサイ有 使用済 63枚」(実際は64枚)、「劣化 38枚」、「未使用 104枚」(実際は103枚)と記載されていた。原板の劣化度は、各々の封筒の内部で、A-Dストリップレベル0.6～0.8程度であった。大半の原板に酢酸臭やカーリングや波打ちが確認され、溶解しているものもあった。

すべての原板が1コマに切り離された状態でビニール袋に収納されていた。ビニール袋の表面には、写真集のページナンバー、撮影場所、撮影年、被写体説明が記入されていたため、写真集との照合作業を容易に進めることが出来た。



図8 野水正朔『淡國写真帖』より 1960年

わかめだこうへい

若目田幸平 1933(昭和8)年 - 東京生まれ。

1958年、早稲田大学第一文学科卒業。家業の豆腐店を営みながら、『太陽』、『アサヒグラフ』、『ドリブ』、『歴史読本』などの写真撮影に携わる。

主な写真集：『東京のちょっと昔』(平凡社 2007年)

主な写真展：「部屋」(銀座ニコンサロン 1993年)

主な受賞：アサヒカメラ 自由の部年度賞第一位(1977年)、第5回準太陽賞(1978年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年8月25日、135判モノクロネガを中心に、4,165点を受け入れた。

○原板の内容

1960年代～1970年代にかけての、東京、千葉、神奈川の下町の風景や人々の暮らしを細やかに捉えたものである。写真集『東京のちょっと昔』に掲載された原板や、写真展「部屋」に使用された原板が含まれる。ほぼ全ての原板に、撮影年、撮影場所、被写体データが記入されており、写真集に使用された原板がまとめられているため、写真集に使用されたコマの照合は容易であると考えられる。

○原板の状態

全体を通じて強い酢酸臭があり、一部に強いカーリングが見られる。A-Dストリップレベルは2～3と高い値を示した。原板の多くがビニール製の包材に封入されており、今後さらに劣化が進行する恐れがあるため、早急な包材交換が必要である。



図9 若目田幸平『東京のちょっと昔』表紙 1975年

いわみやたけじ

岩宮武二 1920(大正9)年 - 1989(平成元)年 鳥取生まれ。

1937年、米子商業高校商業科卒業。1940年、丹平写真倶楽部入会。1946年、フリーカメラマンとなる。1951年、瑛九らとデモクラート美術協会を創設。1955年、岩宮フォトス設立。1966年、大阪芸術大学教授に就任。

主な写真集：『佐渡ヶ島』(角川書店 1959年)、『佐渡』(朝日新聞社 1962年)

『日本のやしろ』(美術出版社 1962年)、『大和の石仏』(淡交社 1965年)

『石の寺』(淡交社 1965年)、『Kyoto in KYOTO』(淡交社 1965年)

『宮廷の庭』(淡交社 1968年)、『日本のかたち』(淡交社 1978年)

『アンコール』(岩波書店 1984年)、『ポロブドゥール』(岩波書店 1990年)

主な写真展：「佐渡」1956年、「ハワイ」1960年、「アンコールワット」1964年、「アルフォト」1970年

「EXPO '70」1970年、「墨と私と」1976年、「ネパールの貌」1979年

「水墨+印刷インク」1981年、「岩宮武二写真展」1981年

主な受賞： 全国カレンダー展文部大臣賞(1955年)、日本写真協会年度賞(1963年)

毎日芸術賞(1966年)、芸術選奨文部大臣賞(1969年)、尼崎市民芸術賞(1969年)

第4回国際出版文化賞(1972年)、大阪芸術賞(1980年)、兵庫県文化賞(1988年)

日本写真協会年度賞(1989年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年8月31日、計230点を受け入れた。内訳は、135判(モノクロネガ167点、カラーネガ19点、カラーポジ7点)、120判(モノクロネガ7点、カラーネガ3点、カラーポジ7点)、4×5判(モノクロネガ17点)、その他フィルム3点であった。

○原板の内容

氏の代表的な写真集である『佐渡』に掲載された原板及びその周辺のものである。1950年代～1960年代前半の新潟県佐渡島の風景、人の営みや文化等が捉えられている。

○原板の状態

段ボール1箱に原板230点とアルバム2点その他資料1点が入っていた。原板の劣化度はA-Dストリップレベル0.5程度と比較的良好であるが、カーリング、銀鏡が多数見られ、特にカラーフィルムは褪色が著しい。また、写真集に掲載された写真の原板は1コマごとに切り取られ、ビニール袋に収納されていた。ビニール袋の表面には、写真集のページナンバーが記入されていたため、写真集とコマ画像の照合が容易であった。



図10 岩宮武二『佐渡』より 1960年ごろ



図11 岩宮武二 写真原板の収蔵状況

やまざきはるお

山崎治雄 1906(明治39)年 - 1987(昭和62)年 岡山生まれ。

1938年、中国写真家集団に参加。1939年、緑川洋一らとカメラクラブ「光芒会」を結成、会長となる。興亜写真報国会、岡山支部長をつとめ、満州へ渡る。戦後、トリオスタジオ開設。岡山の歴史、民俗を撮影により記録する。岡山県勤労者美術展、岡山美術展、審査員。岡山写真連盟参与などを歴任。

主な写真集：『備前加茂大祭』(高山雅之 共著 岡山芸能懇話会 1956年)

『吉川八幡当番祭』(吉川八幡当番祭刊行会 1961年)

『尋牛 平櫛田中作品集』(平櫛田中顕彰会 1970年)、『特別史跡閑谷学校』(福武書店 1975年)

『写真家 山崎治雄の仕事』

(山崎治雄の写真記録を保存顕彰する会 編 日本文教出版株式会社 岡山文庫 2016年)

主な写真展：「ありし日の軽便 西大寺鉄道写真展」(岡山県総合文化センター 1966年)

「岡山の仏たち」(岡山県総合文化センター 1967年)

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年1月30日、135判モノクロネガを中心に、約500点を受け入れた。

○原板の内容

1950年代、岡山県中部で建設されていた旭川ダム及び、旭川総合開発の工事の様子や、ダムに沈む村の人々の暮らしを捉えたものである。『写真家 山崎治雄の仕事』に使用された原板の他、未刊行の写真集『旭川ダム水没の記録』に使用する予定であった原板も含まれる。

○原板の状態

一部の原板は、関係者の手により中性紙性の包材に入れ替えられている。一部に酢酸臭やカーリングが見られる。

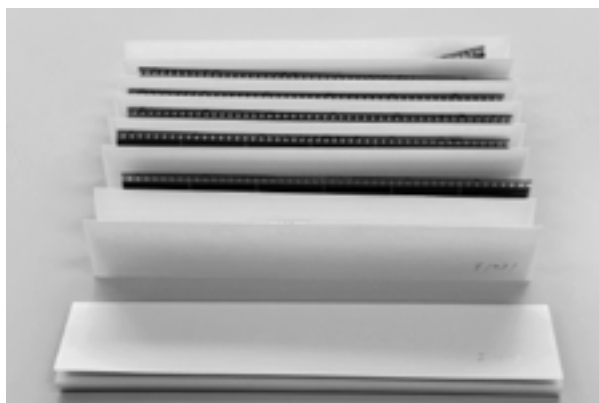


図12 新しい包材に入れ替えられた原板

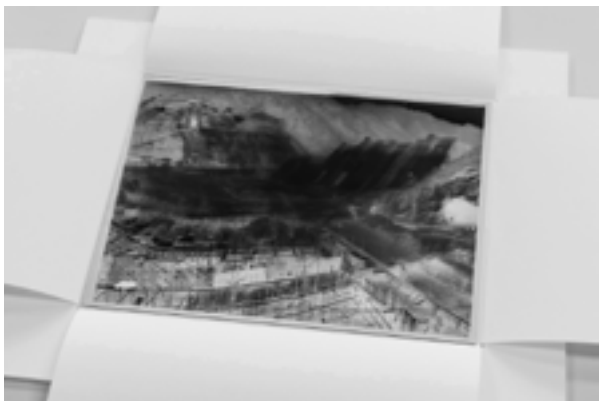


図13 山崎治雄 旭川ダム工事風景(ガラス乾板)

5.3.2. 受入継続中の写真原板の特徴

昨年度までに写真原板を受け入れた写真家のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板の特徴を記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

わたなべよしお
渡辺義雄

【第5回受け入れ】

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年5月13日に、4×5判モノクロネガを中心に、376点を受け入れた。

○原板の内容

ポートレートや、伊勢神宮、帝国ホテル等を捉えたもので、重要な原板と判定した。

○原板の状態

特に目立った劣化は見受けられないが、古い原板には一部に銀鏡、褪色が見られる。

【第6回受け入れ】

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年8月3日、135判モノクロネガを中心に、44点を受け入れた。

○原板の内容

戦中、終戦直後の東京や横浜の焼け跡、繁華街、メーデーの他、1962年の東京湾沿岸部を捉えたものであった。また、第6回受け入れには、戦中、終戦直後の焼け跡、東京文化会館のプリントも含まれているが、原板が存在しない物もある。戦中及び終戦直後を撮影した原板及びプリントは未発表のものが殆どで歴史的価値が高く、重要な原板と判定した。

○原板の状態

特に目立った劣化は見受けられないが、一部に銀鏡が見られる。



図14 渡辺義雄 1949年 桜木町駅前



図15 渡辺義雄 1946年 銀座

おかむらたかし
岡村 隼

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2016年7月4日に、第2回受け入れとして計4,781点を受け入れた。内訳は、120判カラーポジ2点、4×5判モノクロネガ160点、4×5判カラーポジ510点、5×7判カラーポジ3,861点、8×10判カラーポジ247点、モノクロ乾板1点である。

○原板の内容

イタリアを中心としたヨーロッパ各地で撮影された西洋美術作品。今回は写真集、画集に使用した「絵画」、「工芸品」、「陶磁器」の原板を中心に受け入れた。被写体は、エトルスク(エトルリア)、ルネサンス、バロックから現代までの絵画、古代ローマの工芸品、陶磁器など。特に絵画はフラ・アンジェリコ、ボッティチェリ、ラファエロ、ヴァザーリ、ギルランダイオ、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ジョット、ジョルジオ・デ・キリコなどの著名な作品が多く、充実した内容である。

撮影は、被写体の重要な細部はクローズアップを行い、祭壇など絵画が置かれている環境が重要な作品は周辺も写しこむなど、被写体となる作品への理解に基づいて緻密に行われている。現在は撮影ができない教会や焼失した天井画などの原板もあり、西洋美術史研究にとって貴重な記録である。『大系世界の美術』(1971～75年、学研マーケティング)他、日本のみならず海外の美術書にも多く掲載されている。

受け入れた原板については、元々、ご遺族の岡村眞弓氏によって「絵画AA(1)」、「絵画AA(2)」、「絵画AA(3)」、「絵画4 キリコ」、「絵画5 日本関係」、「AC 工芸」、「AE 陶磁」とグループ分けが行われた後、画家別にIDが付与され(例:フラ・アンジェリコの画家IDはANG)、被写体内容についてのデータベースが作成されていた。平成27年度報告書(p.19)で既述のように、このデータベースでは、研究資料としても有効な専門的かつ詳細なメタデータが与えられていた。更に、今回の受け入れでは、掲載された画集・写真集の書名、掲載頁などの詳細なデータも受領した。

○原板の状態

大半がシートフィルムで、1枚ごとに、管理番号が与えられた樹脂製の袋に入れられ、分類別にフィルムの箱に保存されていた。受け入れ後に測定したA-Dストリップレベルは0で、ビネガーシンドロームの発生は見られなかった。保存状態・整理状態、共に概ね良好だったが、カラーポジフィルムには一部褪色が見られた。



図16 岡村隼 写真原板の収蔵状況

みどりかわよういち
緑川洋一

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2017年1月31日、135判・120判モノクロネガフィルムを中心に、約200点を受け入れた。

○原板の内容

1962～1964年に撮影された日本各地の山や海の風景写真が大半を占めた。また写真集や展覧会に使用されたとであろうプリントと原板が一冊にまとめられたアルバムがあった。アルバムの内容は緑川洋一郷愁シリーズ第一章「波の郷愁」より、「売春哀話 おおちょろ舟の女たち」1957年撮影、「鯛網漁懐古 お今日も不漁であったー」1952年撮影、郷愁シリーズ第二章「海路断章」より、「白い村 おある石灰工場の記録ー」1954年撮影、「島の分校 お楽しき少年時代ー」1948年撮影である。

○原板の状態

酢酸臭はなく、変色や銀鏡などもほとんど見受けられなかった。1950～1960年頃に撮影されたとは思えないほど劣化が少ない。



図17 緑川洋一郷愁シリーズ 写真帖

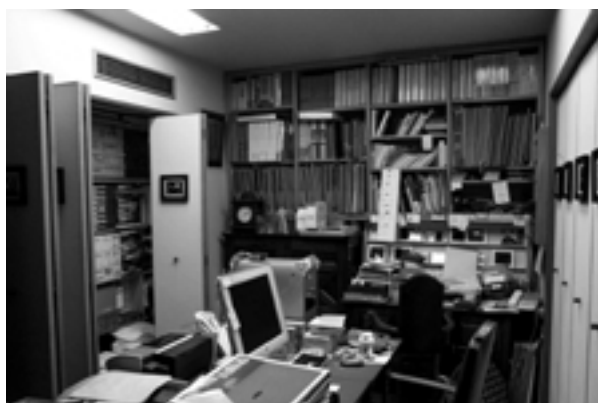


図18 写真原板の収蔵状況

池田 雄二(事務局長)

中川 裕美(調査員)

笛木 諭(調査員)

河原 健一郎(調査員)

渡邊 英雄(調査員)

6. 連携調査

全国各地にある公文書館、図書館、郷土資料館などには、地元の郷土史家や研究者、関係者が撮影した写真及び写真原板が寄贈、寄託されていることが多い。しかし、写真原板は研究費や保存整理する経費が捻出できないまま、収蔵庫や研究室の片隅に積み上げられている状況にある。そうした写真原板にはその土地の行事や風習、人々の生活環境、暮らしの様子を捉えたものが数多くある。これらを集約し一定の基準の元に整理することで、巨大なアーカイブが構築できることを提案し、画像データや資料情報の交換や連携の可能性を模索するための訪問調査を行った。

訪問先は芳賀日出男ライブラリー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、日本近代文学館、周防大島文化交流センター宮本常一記念館で調査及び意見交換を行った。

6.1. 訪問調査

6.1.1. 株式会社 芳賀ライブラリー

訪問日: 2016年5月16日(月)

場所: 芳賀ライブラリー

面会者: 芳賀日出男氏(会長)、芳賀日向氏(代表取締役)、棚木晴子氏

訪問者: 松本徳彦(日本写真保存センター)、渡邊英雄(同左)、中川裕美(同左)

芳賀ライブラリーとは

日本の民俗写真の第一人者、芳賀日出男氏が、自身が撮影した日本と世界の民俗写真をもとに1985年に設立した民族写真のストックフォト。芳賀日出男氏は、1921年生まれ、慶應義塾大学文学部在学中に折口信夫の講義を聴き民俗学へ関心を持ち、民俗学的な視点からのドキュメンタリー写真に新境地を開いた。1995年勲四等旭日小綬章受章、日本写真家協会名誉会員。

芳賀ライブラリーでは、芳賀日出男氏、芳賀日向氏他、50名余の写真家が撮影した世界100ヶ国以上の祭りや年中行事の写真を所蔵している。所蔵写真は、民俗学、民族学、社会科学などの学問上も貴重な記録が多く、学習図書、出版物でも頻繁に利用されている。

写真収蔵状況

マウントされたカラーポジフィルムが中心。日本の祭り1,500タイトル、世界の祭り300タイトル、30万点の写真とその資料を事務所内のキャビネットで保管。ビネガーシンドロームの発生は見られない。近年は撮影にフィルムを用いず、最初からデジタルデータとして撮影された写真も多い。

データベース

情報は、デジタルデータベースで一括管理。ストックフォトとしてリクエストへの迅速な対応が必須であるため、データベースは利用のしやすさを重視して作成している。写真情報はExif形式の画像データで保存し「撮影場所」、「撮影内容」などのメタデータ(IPTC)を埋め込んである。メタデータの中では、特に、利用の際、最も使われる「被写体キーワード」を充実させ、英語キーワードも入れている。キーワードは民俗学の知識に基づいたものが数量制限なく詳細につけられている。

利用については、インターネット上で申込みができるデータベースを公開している。申込み用データベースは、閲覧者のステータス(一般 / 初回購入者 / 複数回購入者)によって閲覧できる範囲が異なる。芳賀ライブラリーでは

権利処理を確実にしているため、信頼が高く公的なサイトでリンクを貼られることも多い。アメリカ※¹、イギリス※²、香港他の海外ストックフォトとも連携を行い、日・英語での相互検索が可能である。



図1 芳賀ライブラリー



図2 芳賀ライブラリー

※ 1 The Image Works <http://theimageworks.com/index.php>

※ 2 Music + Arts Pictures at Lebrecht <http://www.lebrecht.co.uk/>

〔参考〕

1996年、芳賀日出男、『日本の民俗』、東京、クレオ

芳賀ライブラリーWebサイト <https://hagafoto.jp>

6.1.2. 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

訪問日: 2016年5月17日(火)

場所: 早稲田大学演劇博物館事務所

面会者: 張宝芸氏、土屋紳一氏

訪問者: 松本徳彦(日本写真保存センター)、和田直樹(同左)、渡邊英雄(同左)

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館とは

早稲田大学演劇博物館は、1928(昭和3)年10月、坪内逍遙博士が古稀の齢(70歳)に達したのと、その半生を傾倒した「シェークスピア全集」全40巻の翻訳が完成したのを記念して、各界有志の協賛により設立された。以来、演劇博物館には日本国内はもとより、世界各地の演劇・映像の貴重な資料を揃えており、錦絵46,800枚、舞台写真400,000枚、図書255,000冊、チラシ・プログラムなどの演劇上演資料80,000点、衣装・人形・書簡・原稿などの博物資料159,000点、その他貴重書、視聴覚資料など、およそ百万点にもおよぶ膨大なコレクションは、約90年間培われた“演劇の歴史”そのものといえる。演劇人・映画人ばかりでなく、文学・歴史・服飾・建築をはじめ、様々な分野の方々の研究に貢献している。その収蔵資料は館内の展示以外に、Web上でバーチャルに展示を見る「オンラインミュージアム」また、膨大な資料を「デジタルアーカイブコレクション」として、館内やWebで閲覧が可能である。言語は日・英に対応している。

写真の状況

博物館の性質上、歌舞伎等演劇関連の写真プリントの収蔵を主にしており、写真原板(乾板・フィルム)の収蔵は少ない。乾板はデジタル化が完了、フィルムのデジタル化は完了してない。プリントは、物故された役者家族からの寄贈が多く、劇場からプリントの寄贈もある。明治時代の歌舞伎のプロマイドもあり、現在でもプロマイドは収集を続けている。珍しい所では、幻灯を収蔵している。保管状況は、温度20度/湿度50%、写真専用ではなく他の収蔵品と併せて保管している。

データベース

閲覧レベルは4階層で構成され、〈一般(公開)/早稲田演劇閲覧室PC用/研究者用/管理用(内部)〉DBでの公開は、階層により絞り込みをしており、一般公開版は限定的な閲覧のみとなる。DBは内部管理のためのシステム「IBミュージアム」と独自開発を行っている公開システムの2つが連携している。公開用のサーバーの容量は2TBのものを使い、管理用は別に持っている。現在システムの改定中で、3つの早稲田大学施設と共用で使う(演劇博物館・大学史資料センター・會津八一記念博物館)予定である。



図3 早稲田演劇博物館 越路舞台衣装展

[参考]

早稲田大学演劇博物館 <http://www.waseda.jp/enpaku/>

オンラインミュージアム http://www.waseda.jp/enpaku/online_museum/

デジタルアーカイブコレクション <http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/>

6.1.3. 公益財団法人 日本近代文学館

訪問日: 2016年5月17日(火)

場所: 公益財団法人 日本近代文学館

面会者: 富樫嚶子氏(事務局長)、西村洋子氏、信國奈津子氏

訪問者: 松本徳彦(日本写真保存センター)、内堀タケシ(同左)、笛木論(同左)

公益財団法人 日本近代文学館とは

1963年4月、財団法人 日本近代文学館が発足。日本近代文学館は現在、図書や雑誌を中心に、数々の名作の原稿も含め、115万点の資料を収蔵している。それらの資料を閲覧室や展示室で、また書籍や電子媒体として公開し、各種の講座・講演会を開催するなど、一般の読書家から専門の研究者まで、広くさまざまな要請に答えている。2011年6月には公益財団法人の認定を受け、引き続き、近代文学に関する総合資料館、専門図書館として、文学資料の収集・保存・公開と文芸・文化の普及・発展のために活動している。

データベース

データベースシステムは図書館のシステムをカスタマイズしたものを使用している。データベースには図書、雑誌、資料、写真、視聴覚資料など約115万点が登録されている(2015年末時点)。

図書・雑誌・写真に関しては自身のホームページで公開している。そのうち、図書と雑誌は国立情報学センターの検索システムでの検索にヒットするようになっている。

ホームページで公開している画像は無断転載できないよう、ウォーターマークをいれ、画素数を低くした画像を使用している。

利用・貸出に関しては日本近代文学館に来館して検索・申し込み、またはホームページからの検索・申し込みが可能。



図4 日本近代文学館

[参考]

公益財団法人 日本近代文学館 <http://www.bungakukan.or.jp/>

6.1.4. 周防大島文化交流センター宮本常一記念館

訪問日: 2016年6月6日(月)

場所: 周防大島文化交流センター

面会者: 高木泰伸氏

訪問者: 松本徳彦(日本写真保存センター)

宮本常一記念館について

民俗学者宮本常一(1907～1981)は明治40年周防大島で生まれ、大阪の天王寺師範学校を卒業し、小学校で教鞭をとる傍ら民俗学に興味を持ち、柳田國男に師事。渋沢敬三の主宰する日本常民文化研究所(アチックミュージアム)の所員となり、全国の農山漁村を実地調査し、その土地の暮らしを支えるものは何だったかを調査した。記念館は平成16年に設立され、小型カメラで庶民生活を撮影した約10万点の写真原板と調査ノート約6,000点を収蔵している。

写真原板の保存とデジタル画像の公開

写真原板の種別は35ミリのネガフィルム1,909本、カラーポジのスライド約500枚あり、サービスサイズのプリントを貼ったアルバムが171冊ある。現在写真約10万枚をデジタル化しデータベースを構築している。画像は文化交流センターの展示室のパソコンで89,703点が公開され閲覧できる。また、インターネット上では14,282点が閲覧できる。

写真原板の保存には日本写真家協会(JPS)特注品のネガホルダーを使用し、展示室の2階に設けられた書籍収蔵庫に金属製の開き戸式の書棚に、撮影地別に分類されたファイルに納めて収蔵されている。温湿度は常温状態。

データベース

データベースに使用する画像はモノクロモード・解像度4800dpiでスキャンしている。宮本の撮影カメラはハーフサイズのオリンパスペンであるため、画像は15MB程度と比較的小さい容量で構成されている。閲覧にはこの程度で十分対応できる。

大量のプリント及び原板をスキャンして、宮本の調査内容を公開している。調査資料は可能なかぎり出版化を進め、研究成果とともに写真画像を紹介することで業績や宮本が調査した日本の農漁村の生活環境の記録を公開している。



図5 データベース



図6 書籍収蔵庫

[参考]

周防大島文化交流センター <http://www.towatown.jp/koryu-center/sisetuannai.htm>

宮本常一データベース <http://www.towatown.jp/database/>

6.2. 日本写真保存センターの役割

写真原板の収集保存活動は着実に充実しつつあることは、収集・収蔵状況から読み取ることができる。しかし、未整理状況にある物故写真家の原板の収集には時間と労力が追いついていないのが現状である。近現代を記録した数々の写真原板には、日本の歴史研究を進める上で貴重な生き証人ともいえる記録が詰まっている。

それらを一刻も早く収集保存し、調査整理結果をデジタルデータ化して一般公開することが写真保存センターに課せられている使命である。歴史研究のためにも文化資産である写真原板の保存が急務となっている。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

中川 裕美(調査員)

笛木 諭(調査員)

渡邊 英雄(調査員)

7. 写真原板データベース

7.1. 本年度作業概要

日本写真保存センターのデータベースは2つで構成されている(図1)。ひとつは調査した原板の詳細情報を入力するための管理用データベース。もうひとつは管理用データベースに登録された情報から公開に適した部分のみを表示する公開用閲覧データベース。

管理用データベースは凸版印刷株式会社の汎用データベースシステム「SAI-CHI」を利用し、2015年度に開発が完了した(詳細は平成27年度報告書)。本年度は実務レベルで使えるようになった管理用データベースで実際に調査作業を行い、使用感を検証した結果、実務上非効率な部分について修正をした。

公開用閲覧データベースは管理用データベースと同じシステム「SAI-CHI」を利用し開発を行った。本年度はこれまで公開を制限していた閲覧データベースを一般公開できるようシステムの向上を図り、2016年12月に閲覧データベースの一般公開を開始した。

本年度行った管理・閲覧データベースの開発・修正の詳細は7.3.で記す。

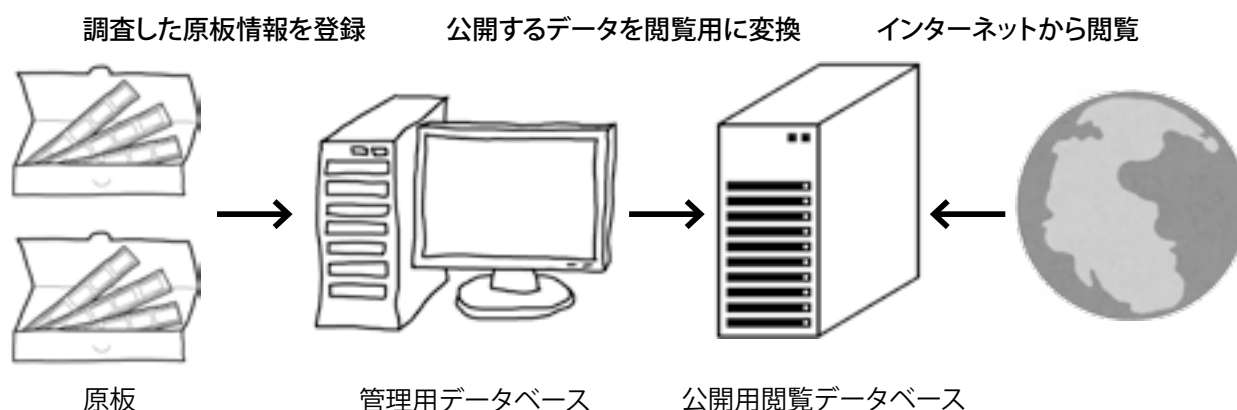


図1 データベースの概念図

7.2. 閲覧データベースの一般公開

これまで閲覧データベースの公開は限定的に行い、一般公開に向けての実証実験を重ねてきた。実証実験の結果に基づきデータベースに修正を加え、2016年12月14日に閲覧データベースの一般公開を始めた。現在約3,700件の写真原板データが登録されている。

閲覧データベースでは写真集など印刷物に掲載された画像とそのコマのトリミングされていない写真原板画像及び写真に関するメタデータが閲覧できる。これらの画像以外に印刷物などに掲載された画像の前後を含むフィルム1本分のコンタクト画像も閲覧することができるが、研究等の利用目的がはっきりとした申請があった場合のみ日本写真保存センターの施設内での閲覧を許可している。

笛木 諭(調査員)

7.3. SAI-CHIによる管理用データベース及び公開用閲覧データベースの構築と公開

7.3.1. はじめに

SAI-CHIで開発を続けている写真原板データベースについて、昨年度までに、管理用データベースは一旦の完成にいたり、データ移行が行われた。実証実験用閲覧データベースについても、実証実験とそのフィードバックへの対応や、登録点数を増やすなどによる改善が重ねられた。

本稿では、今年度の作業を報告するが、まずその概要を記すと、閲覧データベースについては、実証実験用途のものから公開用途のものへの切り替えを目標とし、デザイン、ユーザーインターフェースを中心とした改良を加えることで、2016年12月に無事に一般公開に至った。管理用データベースについては、写真保存センターにおけるデータ移行後の実運用を目指す中で現れた課題点があったため、そこから開発すべき項目を検討し、アップデート開発を行った。以下、それぞれの工程に沿って詳細を記す。

7.3.2. 公開用閲覧データベースの開発について

前年の実証実験の結果を元に、写真保存センターとの協議を行った結果、実際の公開に向けては、デザインやユーザーインターフェースといった使い勝手の部分における改善と、一般公開という形態に沿ったライツマネジメントとを課題とした。

あわせて、公開にあたってはログの記録のため、Google Analyticsの導入と、その集計用プログラムの組み込みを行った。

7.3.2.1. 実証実験用から公開用へ、閲覧データベースの修正

前述の通り、公開に向けた修正のポイントは利用者の使い勝手とライツマネジメントの対策である。その点から考えられた改善が必要な項目を下記する。

- ・項目名などの文言の修正。
- ・表示画像および項目名の順序の設計。
- ・コンタクト画像についての閲覧制限。

7.3.2.2. 閲覧データベースの修正内容の定義と作業

前述の改善点をもとに、検索画面と詳細画面のそれぞれについて、下記のように修正内容を確認し方針を定義、作業を行った。

検索画面について（図2 次頁参照）

- ・「写真集」の文言を「写真掲載媒体」に修正。

公益社団法人日本写真保存協会 日本写真保存センター 写真原稿データベース

日本写真保存センター 撮影者紹介 写真掲載権者紹介 利用ガイド

◆画像検索

撮影者名 撮影者一覧 撮影年 ~ 撮影地 国 地域

写真掲載権者名 写真掲載権者一覧

◆お探しワード

ジャンル ☐ 探検 ☐ 産業 ☐ 交通 ☐ 工業・美術 ☐ 動物・自然 ☐ 人物 ☐ 社会・文化・風俗 ☐ 事件・災害・戦争

◆キーワード検索

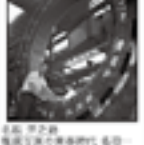
◆撮影者 撮影年 ☐ 性別 ☐ 所属 撮影者 ☐ 所属

検索 クリア

◆検索結果

2671件中 1 ~ 35 件目

1 2 3 4 5 6 7 次へ

 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年
 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年
 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年
 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年
 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年	 大正 明治 明治天皇の御影代 名画一 《明治天皇の御影代》 1933年

2671件中 1 ~ 35 件目

1 2 3 4 5 6 7 次へ

図2 公開閲覧データベース 検索画面

詳細画面について（図3）（図4）

- ・ これまでは、印刷物掲載画像をメインとして表示していたが、コマ画像をメインとして画像の一番上に表示するように変更。これは、写真保存センターのデータベースが見せるべきものとしての優先順位を踏まえてのものである。
- ・ 新たに「原板サイズ」と「被写体画像キーワード・記述」の項目を追加した。
- ・ 各項目の並び順については、以下のように修正をした。
撮影者（氏名、生没年）／タイトル・キャプション／掲載媒体情報／撮影年月日／撮影場所／カテゴリ／原板種別／原板サイズ／解説／被写体画像キーワード・記述／コマ番号／所蔵
- ・ 「閉じる」ボタンの視認性が低く、気付きにくいとの指摘があり、「閉じる」ボタンのサイズを拡大した。
- ・ コンタクト画像については、他の画像と異なり、限られた人のみの閲覧とするため、ログイン認証を行うこととし、またそのためのページを新たに作成した。

公財団法人日本写真協会 日本写真保存センター

■コマ画像



■印刷物掲載画像



撮影者	氏名： 浅野 博 あさの ひろし ASANO, HIROSHI
	生没年： 1929年～2013年
タイトル・キャプション	
掲載媒体情報	YOKOHAMA, 横浜市, 1962年, 横浜市 (p.38)
撮影年月日	
撮影場所	日本 神奈川県 横浜市
カテゴリ	浅野 博内 横浜町・店舗 人物・人（複数） 人物・女性 人物・若者 人物・児童 社会・文化・風俗 男性
原板種別	
原板サイズ	
解説	
被写体画像キーワード・記述	
コマ番号	00029-00064-0010
所蔵	日本写真保存センター

閉じる

図3 公開用閲覧データベース 詳細画面（一般公開用画面：コンタクト画像非表示）

■コマ画像

■印刷可能な画像

■コンタクト画像

撮影者	氏名： 浅野 隆 あさの たかし ASANO, Takashi
生誕年	1925年～2013年
タイトル・キャプション	
掲載媒体情報	YOKOHAMA, 横浜市, 1962年, 横浜市 (p.33)
撮影年月日	
撮影場所	日本 神奈川県 横浜市
カテゴリ	風景・室内 建築物・店舗 人物・人（複数） 人物・女性 人物・群衆 人物・飲食 社会・文化・風俗・労働
原稿種別	
原稿サイズ	
解説	
補注・関連キーワード・記述	
コマ番号	00025-00964-0018
所属	日本写真保存センター

閉じる

図4 公開用閲覧データベース 詳細画面（一般非公開画面：コンタクト画像表示）

7.3.2.3. ログの管理について

閲覧数などのログを管理するため、Google Analyticsの導入を行い、閲覧データベースの検索ページと検索結果ページに、集計用のプログラムの組み込みを行った。

ログ管理については、今後、利用者の傾向や必要に応じて更なる開発も視野にいれておくべきであろう。

7.3.2.4. 公開用閲覧データベースへの変更点及び登録作業

昨年度の実証実験の時点から調査作業も進行しており、その間に新たに管理用データベースに追加されたコマ画像およびその写真家については、公開用閲覧データベースに追加登録を行った。

追加登録後の総数は下記のとおりである。

- ・撮影者：20名
- ・コマ画像数：3,684点

現時点では、この追加登録作業について開発側で代行をしているが、今後は写真保存センターが自身で行えるようにしていくため、管理用データベースから公開用閲覧データベースへのデータ移行ツールの開発を行いたい。

7.3.2.5. 公開用閲覧データベースの今後について

公開用閲覧データベースは、今後、以下のような点を検討していきたい。

- ・用途に応じたログイン機能の拡充。
- ・他館連携方法について横断検索APIなどの検討。
- ・管理用DBとの連携機能の強化。(データ移行ツールの開発)
- ・ログで収集された情報の解析と、その利用方法の検討。

7.3.3. 管理用データベースの追加開発について

昨年度に完成をした管理用データベースであるが、その後の受け入れ調査の中で、昨年度の設計時に想定していた内容では対応しきれない場合が見受けられた。そのため、写真保存センターにおける実運用にあたっては、現状のままでは非効率になる部分などがあった。そこで、追加の開発を行うこととし、その他にもいくつか改善課題を挙げ、写真保存センターと細かく協議をし、開発および更新を行った。

7.3.3.1. 追加開発課題

協議の結果、下記の点を改善課題とした。

- A. 写真家マスター登録画面の受入情報の入力フォームでは、受け入れた箱の階層構造を「箱区分」として管理している。この設計にあたって、昨年度は1階層あたり2桁の数量があれば管理可能として開発を行ったが、その後の受け入れ作業の中で写真家によっては3桁の数量が必要となることが判明した。
- B. データベース上でのストレージボックスの管理番号について、実務上扱っているストレージボックスの管理番号と形式が異なっているが、より使いやすくすべく、データベース上の管理番号と実務上の管理番号の発番形式を近い形式にしたい。
- C. 作業量軽減のため、ホルダーマスター登録を行うと、仮箱に入力した原板総数に応じて自動的にホルダーとホルダー番号が発行される設計になっていたが、実際に登録作業をする上で、この方法では困難が生じている。
- D. Cの修正に応じて、自動で設定されていたホルダーと箱区分の関係を紐づけるインターフェースの実装が新たに必要となる。
- E. 台帳出力時に、コンタクト画像や資料画像がないものでも白紙の台帳を出力していたが、画像がないものについては出力を不要としたい。
- F. ホルダー目録の出力作業には、使用しているブラウザの仕様による表示件数の限界があり、出力対象数が多い場合には上手く機能できない場合がある。特にInternet Explorerを使用している場合には上限数が3,000件と少なく、それ以上の件数となる場合には出力物が表示できなくなっている。

7.3.3.2. 修正内容の定義と作業

前述の修正点について、下記のように修正内容を定義し、作業を行った。

- A. 写真家マスター編集時の受け入れ情報の箱区分について
「箱区分」の桁数は3桁とする。その変更によるシステムの安定性を担保するため、3階層までの合計は1,000箱以下、写真家一人あたりの総数は5,000箱以下と制限を定め、修正を行った。(図5 次頁参照)

図5 修正点A 箱区分の3桁化

B. ストレージボックス番号の命名規則についての変更

ストレージボックス番号の命名規則は、データベース上の写真家番号と箱番号を結合した形に変更し、ストレージボックス番号から写真家と箱の関係が一目で読み取れるようにした。

C.ホルダーの自動生成から手動生成への切り替え

ホルダーは写真家マスター登録画面で入力された原板総数を元に自動で作成されるよう設定をしていた。これを手動生成へ切り替えるため、初期調査ホルダー番号(図6)として入力された数量だけホルダーを作成するように変更を行った。

また、ホルダーの管理番号は、「写真家番号」と「初期調査ホルダー番号」に基づいたものになるよう、発番のルールを以下のように定めた。

- ・ホルダー管理番号:「写真家番号(5桁)」-「初期調査ホルダー番号(5桁)」

(例:写真家番号が00056、初期調査ホルダー番号が0~5と設定された場合、
000056-00000 ~ 000056-00005 が作成される。)

さらに生成されたホルダーを検索しやすくするため、ホルダー一覧に仮箱未設定チェックボックスを追加した。(図7)

図8 修正点D ホルダーマスター登録での箱区分選択と仮箱内容の表示

E. ホルダー台帳の出力物について

台帳出力時にコンタクト画像や資料画像がないものについては出力しないように修正を行った。

F. ホルダー目録の出力機能について

出力に関しての問題は、特に表示件数の上限が低いInternet Explorerを基準とし、写真家の受け入れ番号ごとに3,000件(枚数:50ページ)ずつに分割して出力できるよう修正を行った。

7.3.3.3. 管理用データベースの今後について

管理用データベースについては今回の追加開発により、運用において、現時点で優先順位が高かった改善項目には対応ができた。

今後としては、引き続き実運用上の最適化と、公開用閲覧データベースとの連携、他館連携や利活用までを視野にいった機能拡充として、以下の点を考えていくべきであろう。

- ・受入情報、保管情報、ストレージボックス情報の管理機能の拡充
- ・管理用データベースから公開用閲覧データベースへのデータ移行機能の付加
- ・利活用、他館連携に向けた設計

7.4. 写真保存センターデータベースの今後について

今年度の最大の達成点は、無事に閲覧データベースが公開されたことであろう。公開用閲覧データベースについては、過去に繰り返した実証実験の結果としてシンプルで見やすいものになっており、筆者の周辺へのヒアリングにおいても好評を得ている。

今後は、安定した実運用の維持と最適化については検討を継続しながらも、より広い視野への対応が求められる。利活用およびそのための貸出管理や、他館連携などのデータベースの汎用化など、将来像に対しての効果的な設計と開発が必要となるであろう。

西川 裕規 (凸版印刷株式会社 トップランアイデアセンター 関西TIC本部 ICTソリューション部)

木下 悠 (凸版印刷株式会社 情報コミュニケーション事業本部 トップランアイデアセンター 先端表現技術開発本部)

8. 情報発信・その他

8.1. 情報発信

日本写真保存センターでは例年に続き、セミナー、写真展等で調査成果の情報発信を行った。

特筆すべき事項としては、日本写真保存センターのWebサイトリニューアルが完了したこと、写真原板データベースを公開し、写真の検索が行えるようになったことがある。(詳細は7.1.～7.3.および8.4.)これによって調査成果の一般公開が可能になり、センターからの情報発信がよりスムーズに行えるようになった。

また、広く写真原板を保存する重要性を訴えるため、他機関主催のシンポジウムなどへも参加し情報発信、意見交換を行った。昨年に続き、新聞、雑誌、TVなど各種メディアでの取材、原板利用もあり、写真原板の保存とアーカイブ化への関心が高まったことが感じられた。

8.1.1. 展示

8.1.1.1. 「知っていますか …ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 – 被爆から70年」展

日程：2016年7月19日(火)～24日(日)

会場：京都市立美術館 別館1(京都)

概要：入場者は、約2,100人。昨年度JCHフォトサロンで開催した同名写真展を、京都市立美術館で巡回展示した。新聞、TVでも紹介されたためか、5日間という比較的短い期間にもかかわらず、2,100人の来場者を数えた。アンケートでは原子爆弾の惨禍をハイクオリティなプリントで詳細に見たことへの衝撃を記入する方が多く、記録資料としての写真原板保存の重要性が認知された。

8.1.1.2. 「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」展(詳細は8.2.)

[東京展]

日程：2016年10月27日(木)～11月9日(水)

会場：ポートレートギャラリー(東京)

[大阪展]

日程：2016年11月24日(木)～30日(水)

会場：大阪ニコンサロン(大阪)

概要：東京と大阪を同内容で巡回した。東京展は3,240人、大阪展は2,169人入場。昨年度受け入れた渡辺義雄写真原板から新たなプリントを制作して開催した。



図1 「渡辺義雄の眼」東京展会場

8.1.2. セミナー

8.1.2.1. シンポジウム「学芸員養成と情報技術教育を考える」

日時：2016年7月30日(土)13:00～18:00

会場：日本大学芸術学部江古田校舎(東京)

主催：日本大学芸術学部共同研究「アート・アーカイヴ構築に向けての研究」グループ

講演：木村三郎(日本大学芸術学部)/ 中川裕美(日本写真保存センター)

岡島尚志(東京国立近代美術館フィルムセンター)/ 水嶋英治(筑波大学)

パネラー：松本純子(文化庁美術学芸課)/ 川上央(日本大学芸術学部)/ 高橋則英(同左)

概要：アート・アーカイヴ作成のための専門教育をテーマに討議。日本写真保存センターからは写真原板保存の実践とデータベース化の現状を紹介し、楽譜、映画フィルム、博物館資料等、他分野の資料をアーカイブ化している専門家と意見交換を行った。他機関から日本写真保存センターの写真原板の保存法を知りたいという要望が多く、写真原板の保存とアーカイブ化の手法は、研究者や写真原板収蔵機関から求められていることを再確認した。

8.1.2.2. JPS関西・セミナー「渡辺義雄からのメッセージ フィルム保存の重要性」

日時：2016年11月25日(金)14:00～16:00

会場：大阪ニコンサロン・セミナールーム

講師：松本徳彦(日本写真家協会)

概要：入場者は60人。渡辺義雄展にあわせ、渡辺義雄の写真を解説すると共に、写真フィルムの劣化対策と保存方法などについても説明し、日本写真保存センターの活動と、写真原板アーカイブの構想を紹介。参加者はJPS会員が主で、特にフィルムの保存については熱心な質問が多く寄せられた。

8.1.2.3. page2017オープンイベント「日本写真保存センター」セミナー(詳細は8.3.)

「時代を記録した写真原板に光を！－眠っていた写真フィルムを、目覚めさせ、活用しよう－」

日時：2017年2月8日(水)13:30～16:30

会場：池袋サンシャインシティ文化会館(東京)

概要：page2017オープンイベントとして日本写真保存センターの活動を紹介



図2 page2017 講演

8.1.3. メディア掲載

本年度は以下のようなメディア掲載の他、読売新聞、京都新聞などからも取材を受け、発信を行った。

- ・BSN新潟放送「にいがた偉人伝 渡辺義雄 ～誠実な眼差しの先に～」9月10日放送
- ・「渡辺義雄資料より伊勢神宮」、『建築雑誌』11月号、日本建築学会、pp.2～3
- ・『全科協ニュース』vol.47、「写真原板(フィルム)の保存とその利用」、全国科学博物館協議会、pp.4～6

8.1.4. 利活用

本年度は以下の原板利用があった。

- ・渡辺義雄：BS朝日、新潟放送、建築資料研究所『庭』
カドカワ書店『文豪ストレイドッグス公式国語便覧』
関東学院大学大学院入試問題
山梨県立文学館広報資料
- ・山端庸介：TV朝日「報道ステーション 8月8日広島・長崎原爆特集」

中川 裕美(調査員)

8.2. 「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」展の魅力

渡辺義雄を建築写真に誘ったのは、美術史家の板垣鷹穂と建築家の堀口捨己であった。斜陽を受け明暗の強い外壁を幾何学的な構成でとらえた「御茶の水駅」(1933年)。その抽象的な画像が「新興写真」の代表作と称され、その後、建築写真の第一人者として活動することになる。

日本の文化を海外に紹介する活動を行っていた国際文化振興会の依頼で、1937年のパリ万国博覧会日本館に飾られた「日本の住生活」という写真大壁画(構成・河野鷹思)がある。

この振興会が戦後初の仕事として取り組んだのが『Architectural Beauty In Japan』(日本の建築美)1955年刊であった。渡辺はこの編集会議の席で「建築家の堀口捨己、建築史家の神代雄一郎、振興会の永田弁三郎が、来年1953年に行われる伊勢神宮の式年遷宮を撮影しよう」という提案をうけ、交渉することになった。しかし明治初期に横山松三郎が板垣の外から撮って以来、撮影禁止になっていた聖域を撮ろうということから、意を決して堀口と神代が交渉することになり、そこに渡辺が加わって交渉が始まった。「初日は造営局の人たちと打合せしたが、恐れ多くてできない」とのことで物別れ、二度目は振興会の岡部会長にも参加してもらい、大宮司、造営局長を交えて交渉をする。渡辺と堀口が「遷宮する前は、まだ神様がお入りになっていないので、建物だけを撮りたい」と懇願し、やっと遷宮前の1953年9月15日～17日までの3日間と許可が出た。撮影には助手と二人だけ、身を清め、洋服の上に白帷子を着て、草履を履き、お払いを受けてから撮影に取りかかった。こうして出来上がった写真は、『Architectural Beauty In Japan』(日本の建築美)のほかに、1962年丹下健三、川添登の編集で『伊勢ー日本建築の原形』(朝日新聞社)として出版された。3年後の1965年にはマサチューセッツ工科大学から英文の『ISE』として出版され海外でも伊勢神宮の建築美に関心が高まった。

写真保存センターが収集した写真原板には、『奈良六大寺大観』や『大和古寺大観』などの歴史的建造物、『帝国ホテル』『新宮殿』『迎賓館』などの重厚な建物をその目的と機能的特徴を的確にとらえた格調の高い作品である。

1956年撮影の「イタリア」「モスクワ」は、第二次大戦後の復興途上の両国にはじめて足を踏み入れ、伝統や文化の違い、風習が異なる人々の暮らしのありさまを短期間で的確にとらえ、スナップ撮影の腕前の確かさをみせた。

渡辺のスナッフは、1932年に『フォトタイムス』で発表した〈カメラ・ワーク〉の「レビューを見る」や「カフェを見る」「サーカス」「ダンスホールを見る」などにその片鱗を見出すことができる。1937年に著した『スナッフ写真の狙ひ方・写し方』(玄光社)で、「写真の客観性を認め、その効果を如何によりよく表現するか……実生活の自然の中から、美しい対象を発見して、客観的に巧みに表現する」ことが大事であると写真哲学を述べている。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

8.3. 「日本写真保存センター」セミナー

8.3.1. セミナー概要

- セミナー名: page2017オープンイベント 「日本写真保存センター」セミナー
「時代を記録した写真原板に光を！ー眠っていた写真フィルムを、目覚めさせ、活用しようー」
- 開催日時: 2017年2月8日(水)13:30~16:30
- 開催場所: 池袋サンシャインシティ文化会館7階710会議室
- セミナー内容

いま、日々の暮らしや歴史的な出来事を撮影、記録したフィルムが劣化と散逸の危機に瀕している。特に撮影者が物故されると、フィルムの保存は遺族にとって大変な重荷になっている。遺族のフィルムの保存状況を見ると多くが常温のまま部屋の片隅に整理されないまま放置されているが、わが国の高温多湿という気象条件は、フィルムの保存には適していない。郷土資料館や文書館などに寄贈されたフィルムも同様に、利活用されないまま眠っていることが多くある。

日本写真保存センターでは、こうした眠っているフィルムを探し出して収集・保存し、歴史的・文化的な価値を有する写真画像を利用するにはどうすればよいか、を調査研究している。

本セミナーでは、センターの研究成果を紹介し、写真原板の活用について考察する。また、会場では、資料保存関係各社のブースで、フィルムを長期保存するための包材(保存容器)を展示し説明した。

- 講演
 1. 「日本写真保存センターの役割」
講師: 松本徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)
 2. 「写真原板の適切な保存」
講師: 中川裕美(日本写真保存センター調査員)
 3. 「写真原板のデータベース」
講師: 河原健一郎(日本写真保存センター調査員)
 4. 「写真原板データベースの価値について」
講師: 丸川雄三(国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授、日本写真保存センター諮問調査委員)
 5. 「保存に適した包材のデモンストレーション」5社
(株)コスモスインターナショナル、(株)資料保存器材、(株)TTトレーディング(旧社名 特種紙商事(株))
PGI、ラーソン・ジュール・ニッポン(株)



図3 page2017 講演



図4 page2017 会場

8.3.2. セミナーまとめ

page開催時期に行う当セミナーも5回目となった。今回のセミナーは当センターがこれまで進めてきた写真原板の保存のための調査・研究及び利活用のための写真原板データベース研究の成果を紹介した。セミナー講師として日本写真保存センターの松本、中川、河原の3名に加え、当センターの諮問調査委員でもある丸川雄三氏(国立民族学博物館 准教授)の講演も行った。また写真原板の包材のデモンストレーションについても引き続き強い要望が出ていることから、包材研究グループのメンバー5社による自社の製品の展示及び説明を実施した。

セミナーの事前準備、会場の設営、撤収等については、これまでの経験、ノウハウを生かしてスムーズに行うことが出来た。

また今回の来場者数はセミナー関係者21名、聴講者101名、合計122名となり、昨年に比べ35%増となった。レイアウトについては、来場者増に加え包材5社の包材デモスペースを確保する必要から、昨年と比べ大きく変更した。配布物については、例年通りのレジュメ・アンケート用紙に加え、今回新たに「日本写真保存センターの活動」という当センターの活動をわかりやすく説明した写真中心のパンフレットを用意した。

講演の後、Q&Aセッションを設けたところ、写真原板の調査対象・収集保存基準、フィルムの修復やカラーフィルムの褪色対策等々の質問が出てきて活発なQ&Aとなった。

8.3.3. 聴講者アンケート結果

聴講者に対するアンケートを実施したので、その結果を報告する。

1) 聴講者(署名簿)の内訳

セミナー関係者(講師、スタッフ、包材デモ社員)を除く聴講者合計人数101名

内訳	JPS・写真家	16名 (16%)	前回	17名 (24%)
	写真団体・個人	5名 (5%)		5名 (7%)
	公的機関・大学	21名 (21%)		9名 (13%)
	放送・新聞	12名 (12%)		7名 (10%)
	印刷・出版	3名 (3%)		11名 (16%)
	その他企業	31名 (31%)		10名 (14%)
	未記入	13名 (13%)		11名 (16%)
	計	101名		70名

昨年のセミナーとは、セミナー内容が異なるので、単純に聴講者を分類比較しても意味がないが、共通点、異なる点について記述する。

- ①今回は企業や公的機関・大学の比率が高い。(今回企業31%、公的機関・大学21%)
- ②今回は印刷・出版社の比率が低い。(今回3%、前回16%)
- ③JPS・写真家の人数はほぼ同じだが、比率は下がった。(今回16%、前回24%)

2) アンケート分析

昨年同様、セミナー聴講者に対してアンケート調査を実施したので、結果を報告する。なおアンケートの集計結果(有効回答数57名)の詳細は割愛する。

ここではアンケートで特徴的な部分について記述する。

① 住所

東京で50%、神奈川、千葉を含めた1都2県で73%を占める。

遠方では青森県、福岡県から各1名、兵庫県、岡山県から各2名参加していた。

② セミナーの情報入手元

前回同様多いのは、JPSからの案内(メール、郵便物)が33%、知人からの紹介が26%を占める。チラシ11%、JPSホームページ7%と比率も増えてきた。

③ 参加目的

研究(30%)、所属先のアーカイブのため(29%)、自分あるいは家族のアーカイブのため(18%)となっている。目的がはっきりした参加者が多く、また写真原板のアーカイブについて取り組もうとしていることがわかる。

④ セミナー講演評価

よかった(72%)、ふつう(14%)、満足できなかった(2%)、無回答(12%)という結果。前回のセミナーよりも評価が上がった。

なお、満足できなかった理由としては、「新規性がない」とある。

⑤ 包材デモ評価

よかった(51%)、ふつう(26%)、満足できなかった(0%)、無回答(23%)

現物が見られたこと、専門家の話が聞けたことがよかったとある。

⑥ デジタルアーカイブ化

している(42%)、していない(35%)、無回答(23%)

アーカイブ化は思ったより進んでいないように思う。前回も同じような比率であった。

⑦ 画像保管メディア、ストレージ

PC/HDD(28%)、BD/DVD(10%)、クラウドサーバー(10%)となっている。

予想通りの結果となった。今後クラウドサーバーが増えてくると思う。

⑧ 困っていること

包材(16%)、未整理(15%)の二つが多く、次にアーカイブの構築、データバックアップ、デジタル化の方法、アーカイブの維持メンテナンスが10%前後で並んでいる。

実際のシステム構築作業や運用メンテナンスで困っていることがうかがえる。

また意外とセキュリティー(1%)には悩んでいないようだ。

⑨ 今後の対応

システムの構築(28%)、それ以外が7-8%となっている。意外と空欄42%と目立っているが、検討中ということか。いずれにせよこれからという傾向が出ている。

池田 雄二(事務局長)

8.4. Webサイトのリニューアル

情報発信、広報活動を強化するため、日本写真保存センターWebサイトのリニューアルを行った。サイトコンテンツの作成、管理に、コンテンツマネジメントシステム「WordPress」を使用することで、容易な情報発信とサイト管理とが可能になった。一部旧サイトの内容を引き継ぎながら、掲載情報を整理し、現状に則した情報に内容を刷新した。セミナー等のイベントの告知や相模原フィルムセンターへの入庫などの活動報告をブログ形式で掲載することで、簡便かつ頻繁な情報発信が可能になった。イベント告知については、包材各社Webサイトへの情報掲載や、FacebookやTwitterなどのSNSへの掲載も見られるなど、広く情報が共有されるようになった。また、今年度より公開を開始した「写真原板データベース」の入口ページを設け、公開用閲覧データベースへのスムーズなアクセスを可能にした。

サイトコンテンツは以下の通りである(2017年2月現在)

- ・センター概要

写真保存センターの沿革や、写真原板を収集する意義、業務内容など、写真保存センターの活動全般について説明する。また、収集した写真原板について、写真家別に代表作を紹介する。

- ・収集

写真保存センターで収集する写真原板の基準や、権利処理について述べる。

- ・保存

写真原板の調査、収集、アーカイブ化、収蔵までの作業の流れを説明する。また、収集写真家宅の現地調査などから明らかになった、家庭での写真原板の保存状態と、一般的な劣化状態の傾向について、その原因と対策について述べる。

- ・アーカイブ

写真原板のアーカイブ化の意義と、写真保存センターで作成するデータベースの特徴を述べる。

- ・サポート

写真保存センターの支援会員、寄附制度を紹介する。また、写真原板の寄贈を募る。

- ・資料

写真保存センターが作成した報告書、小冊子、日本写真家協会会報より「日本写真保存センター調査活動報告」項を掲載する。

- ・よくある質問

写真保存センターについて、質問される頻度の高い情報をQ&A形式で掲載する。

- ・お知らせ

写真展やセミナーの開催、相模原フィルムセンターへの入庫など、イベント告知や活動報告を行う。

- ・写真原板データベース

公開用閲覧データベース「写真原板データベース」の入口ページ。「写真原板データベース」の基本的な情報や、掲載画像や文章に関する著作権情報を掲載する。

- ・日本写真保存センター WebサイトURL

<http://www.photo-archive.jp/>

河原 健一郎(調査員)

8.5. 「文化財写真フィルム」(岩波書店所管)の寄託

平成28年12月、日本写真家協会と岩波書店との間に奈良六大寺(法隆寺、東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺、西大寺)をはじめとする古社寺に伝存する建造物、彫刻、工芸、絵画、書跡などの文化財のうち、国宝・重要文化財に指定されたものすべてを克明に記録した「文化財写真フィルム」の寄託にかかわる合意が交わされた。

この合意にいたる背景について略述すると、戦後間もない昭和20年代、各種のグラフ雑誌、文芸誌、美術誌などが続々と復刊・創刊される出版ブームが現出した。そして昭和30年代にはいり、大型で豪華な美術全集が競って刊行されることになった。そこに仏教美術の中心たる奈良や京都の美術工芸品がとりあげられる機会も急速に増えていった。

当時の撮影は大型組立カメラが主体で、照明光源として高熱を発するタングステン白熱ランプによる長時間露光が多くあり、ために被写体の文化財が毀損されるのではないかと懸念が少なからず存在した。それもあってか、一度徹底かつ大規模な写真撮影をおこなって、その成果をひろく利活用に供することが、将来的には撮影を抑制し、文化財の良好な保存継承に資するのではないかとということが考慮されることになった。

昭和40年、奈良六大寺の管長・長老たちが構成する「隣山会」の発意にはじまり、文化庁や国立奈良文化財研究所などの関連機関の協力を得て、第一線の美術史・建築史研究者による寺宝の周到な学術調査、すぐれた写真家による徹底的な写真撮影が検討され、この事業の実現に岩波書店の協力が求められた。

奈良六大寺文化財の撮影には、あしかけ8年の歳月を要した。そこに入江泰吉、坂本万七、藺部澄、辻本米三郎、永野太造、米田太三郎、渡辺義雄の諸氏が参加し、大判カメラにより撮影された「文化財写真フィルム」は1万点余となり、その成果は『奈良六大寺大観』(全14巻)として刊行された。ひきつづき昭和56年から奈良を中心とする大和地方の当麻寺、秋篠寺、中宮寺、室生寺など21ヵ寺の文化財撮影が行われ、『大和古寺大観』(全7巻)として刊行された。

これら「文化財写真フィルム」は、当初の関係者合意により、岩波書店が保存管理し、著作権者たる写真家および文化財所蔵者の同意をえて外部からの利活用の要請に対応してきたものである。今回の合意によって、爾今は日本写真家協会が受託し、大判フィルム約15,000点を収集予定。

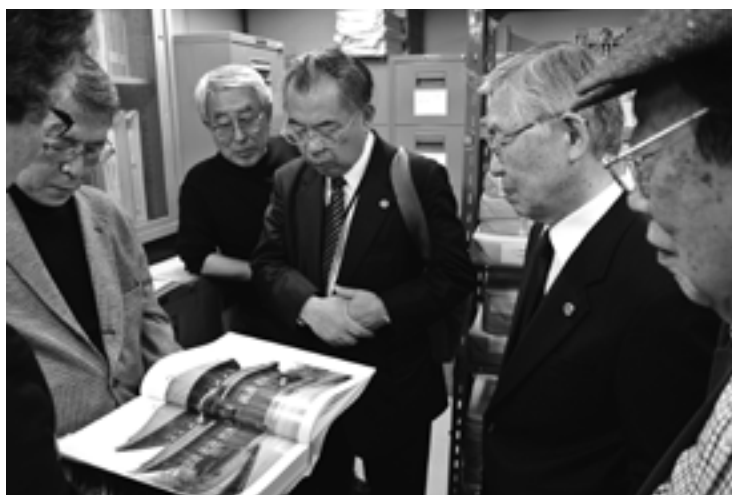


図5 岩波書店

多田 亜生(編集者)

9. 支援組織

「日本写真保存センター」の活動は年々拡充してきているが、過去を振り返ると大きく拡大した時期が3回あった。第1回目は、文化庁の委嘱事業「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」が始まった2007年、第2回目は「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」に写真原板を収蔵することが出来た2012年、第3回目は写真原板の調査研究をサポートする支援組織を設立した2014年である。

その支援組織もすでに3年が経過し、支援組織の設立から現在までの経過と支援組織のサポート内容について振り返ってみたい。

9.1. 「日本写真保存センター」と支援組織

「日本写真保存センター」のミッションは、一言でいうと日本文化・歴史を色濃く記録した写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化と活用である。

現在の「日本写真保存センター」の源流は2001(平成13)年「日本写真家協会」内に設立基金を設けたことに始まるが、ミッションの具体的な活動起点となったのは、2007(平成19)年度からスタートした「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」、その後更に発展し2011(平成23)年度から「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」といった一連の調査研究を文化庁から継続して受託した。繰り返しになるが、このように「日本写真保存センター」の活動は、文化庁の調査研究事業受託が基本となったが、これに東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館への収蔵や支援組織の立ち上げを経ることで、事業の拡充が図ることが出来た。

支援組織はその名の通り、「日本写真保存センター」の事業活動に賛同し、これを支援するための組織である。その支援組織を立ち上げる前段階として、公益社団法人日本写真家協会とキヤノン、ニコン、富士フイルムの4者で支援組織の役割や支援内容などをまとめあげ、公益社団法人日本写真家協会の賛助会社を対象に支援組織会員参加の呼びかけを行った。賛助会社は写真や印刷に属する企業が大半であることから写真原板の保存活用に関する意義の理解や知識が豊富であり、写真原板の保存や活用の事業に対する理解が得やすかった。

初年度は12社が支援組織の会員となり、現在では13社となっている。

9.2. 支援組織の経緯

- 2013年06月 支援組織準備のため3社(キヤノン、ニコン、富士フイルム)との協議
- 2014年01月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
- 2014年05月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
- 2014年10月 支援組織12社による初めての「支援会議」を開催
- 2015年04月 支援会社が14社となる
- 2015年08月 原爆展に支援会社が協賛
- 2016年04月 支援会社が13社となる
- 2016年11月 渡辺義雄展に支援会社が協賛
- 2017年03月 保存センター実務責任者をニコンからの派遣(責任者入れ替え)

9.3. 支援組織のサポート内容

支援組織から「日本写真保存センター」への具体的なサポートとしては

- ① 事業運営に必要な資金・要員の安定的確保のためのサポート
- ② 事業内容の啓蒙活動に対するサポート

の2つであり、以下詳しく述べる。

① 事業運営に必要な資金・要員の安定的確保のためのサポート

「日本写真保存センター」の活動拠点は千代田区一番町にあるJCIIビル内にあり、写真原板の調査から保存、アーカイブ化の一連の作業は調査員やアルバイトの総計6名で行っている。保存センターといえど、当然ながら一般企業・団体と同じようにオフィス賃貸料、光熱費、人件費、IT機器代等々の費用が発生する。その費用は事業活動が拡大するにつれ膨らんでいる。

現在保存センターに必要な事業費の大半は文化庁から支給されているものの、「日本写真保存センター」の活動が拡充するにつれ資金不足が拡大している。

支援組織は、「日本写真保存センター」に資金サポートを行い、これにより保存センターは事業を安定的にまた継続的に活動することが出来ている。支援組織からの資金は、主に物品の購入や人件費などの必要経費の一部補てんとして使用している。

また支援会社は事業運営に必要な要員サポートをしている。具体的には支援組織会員会社のうち1社から常勤の業務管理者1名を2年間毎に日本写真保存センターへ派遣し、保存センターの業務を手助けしている。これまで実績としては、キヤノンから1名2014年1月から2017年4月(予定)まで派遣されている。その交代要員としてニコンから1名2017年3月から派遣された。派遣された要員は保存センターの事務局長として日常の業務管理や作業実務に従事している。

② 事業内容の啓蒙活動に対するサポート

先に述べたように我々「日本写真保存センター」のミッションは、写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化とその活用であることは言うまでもない。

特にフィルムベースの写真原板はビネガーシンドロームといわれる高温多湿によるフィルムベースの加水分解で、フィルムに残された画像が破壊され、貴重な記録がなくなってしまうことが発生しているため調査、収集、保存の作業を加速する必要がある。

文化庁の委託を受けることにより、この作業が順調に進めることが出来ているものの、「日本写真保存センター」自らがこれまで収集した写真原板の本数は20万本程度であり、広く日本国内に存在する収集すべき本数から見れば微々たるものであることは否めない。

このように保存センター自身の写真原板収集活動には物理的な限度があり、飛躍的に伸ばしていく可能性は低いと言わざるを得ない状況の中で、より前向きな保存活動の対応として、写真原板の保存と活用に関する問題提起と啓蒙活動を更に充実することである。

「日本写真保存センター」の市場調査、収集、保存、アーカイブ化の活動を積極的に紹介し、この保存活動を通じて我が国の歴史的文化的価値のある写真原板が保存され、これらの画像が将来に渡って活用することが出来る環境が整いつつあることを認識していただくことで、より前向きな保存活動につながっていくものと考えている。

上述したような我々の情報発信、保存啓蒙活動は保存センター自ら行くとともに同じ価値観を共有する支援組織

会員が協力して、積極的に活動していくことが重要である。

具体的には、保存セミナー、写真展、印刷物発行、Webサイト等々保存に関するイベントや啓蒙活動に対して支援会員が協賛や参画など積極的に協力しているのである。

以上の様に「日本写真保存センター」は支援組織と協力しながら写真原板の収集、保存、利活用の事業活動を展開している。

今後、更に支援組織会員数を増やし、活動の輪を広げていきたいと考えている。また支援という広い枠では、支援組織のみならず、ボランティア要員の確保や一般団体、個人からの寄付も積極的に募っていきたい。

次に「日本写真保存センター」支援組織の概要及び支援組織会員の募集事項、会員紹介について記述する。

9.4. 支援組織の概要

「日本写真保存センター」が行っている歴史的、文化的な写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化活動の促進や啓蒙活動を充実させるために支援組織を設立する。

「日本写真保存センター」はその活動に必要な要員派遣を支援会員会社に依頼出来る。また「日本写真保存センター」の経費の一部を補てんするために支援組織から会費を徴収する。

支援組織会員の募集要項

要員：キヤノン、ニコン、富士フィルムの3社のうち1社から1名を順次「日本写真保存センター」に派遣する。

任期は2年。今年春にキヤノンからニコンに交代。

会費：数十万円/年(4月から翌年3月までの年会費)

会議：2回/年

支援組織会員(平成29年3月時点 13社・団体)

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

オリンパス株式会社

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

凸版印刷株式会社

株式会社ニコン

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレイムマン

一般社団法人日本写真著作権協会

池田 雄二(事務局長)

10. まとめ

渡辺義雄撮影の写真原板について

2013(平成25)年度から始まった渡辺義雄の写真原板の収集は2016(平成28)年度末までに、約24,000点に及ぶ。ほかに遺族から京都工芸繊維大学の松隈洋教授のところに預けられていた建築家前川國男が設計した建造物の竣工写真約400点をはじめ、日本近現代建築資料館、国立西洋美術館、東京都文化会館が預かっている写真(主としてプリント)の収蔵と利活用について、当写真保存センターと打合せを数度にわたって行った。結論は、写真原板は写真保存センターが収蔵し、プリント類は現に所有している機関が整理し保存することを決めた。それぞれの機関が写真情報を共有することで、利活用が円滑に行えるように整備する検討も進めている。

同様に岩波書店が撮影原板を管理運用している『六大寺大観』や『大和古寺大観』、「法隆寺」「東大寺」「平等院」「出雲大社」などの写真原板を写真保存センターが寄託を受け、利活用できるように整備することにした。

吉岡専造撮影の写真原板について

写真保存センターが寄贈を受けた写真原板のなかに、朝日新聞社在職中の法人著作に該当するものがあり、遺族、朝日新聞社、写真保存センターが協議し、原則として写真原板の収蔵と利活用は写真保存センターが、デジタル化したデジタルデータは朝日新聞社が管理、活用することにした。

今後こうした事例が増えることも想定して、弁護士を交えての協議を行い円滑な管理運営と利活用が行えるような法的周辺環境の整備を行うことにした。

写真保存センターの活動を促進するためには…

収蔵している写真原板の内容を一般に広く知らせる方法としては、写真展の開催と図録の発行が欠かせない。2015(平成27)年度の「原爆展」はその意味ではもっとも効果的な催しであった。2016(平成28)年度の「渡辺義雄展」も同様に、写真のもつ遡及、伝達力の大きさを実感することができた。また、温故知新、時代を遡って過去の歴史や知識を汲み取ることの大切さを、写真から学ぶことの意義を知る機会となった。

また、写真には写真家が意図したもの以上の光景が記録されている。例えば下町の家々の表札や看板、壁に貼られた広告物からその時代の庶民生活の様相を知ることができる。風俗や風習なども読み取れることだ。何を食べ、どんな暮らしをしていたかも分かるから面白い。文化人類学的な、社会学的な見方もできるなど、その分析如何によって内容の意味が広がる、変化することなど、読み手の学習力の差もあって、写真には無限な力があることに気づく。などなど写真の分析力が試される。

最後に、連携調査で分かったことは、どの機関も収蔵しなければならない資料(写真原板等)が膨大にあること。しかし予算が無いため実働できる範囲が限られていて、眠らせたままの資料に困っている。資料をデジタル化して公開する必要性に異を唱える人はいない。にもかかわらず改善される気配は見えない。アーカイブ連携を必要とする以上は、個々の努力だけでは改善できない。国家レベルでの施設の建設、人材の育成、調査費についても課題が多い。

写真原板の収集は限りない。それだけにそれに見合うだけの費用の調達が大事だ。長期保存に欠かせない中性紙による包材の交換費用も馬鹿にならない。スキャンしたデータの恒久的な保存管理。データベースの日常的な更新、メンテナンスなど費用のかかるものばかりだ。地方の郷土資料館などの情報の交換、データの共有化なども必要だ。簡素化、省力化など可能な範囲にも限界がある。根本的なアーカイブ概念の整理、利活用の方法などを見直す時期に来ているように思う。アーカイブは国家レベルでの再構築と構造改革が望まれる。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

日本写真保存センターの活動

保存センターは時代の様相を捉えた様々な写真の撮影原板(フィルムや乾板)を収集し、後世で利活用することを目的に、文化庁の委嘱を受けて収集調査活動を行っています。

調査を進めるとフィルム類の劣化が随所でみられ、保存の大切さを実感します。

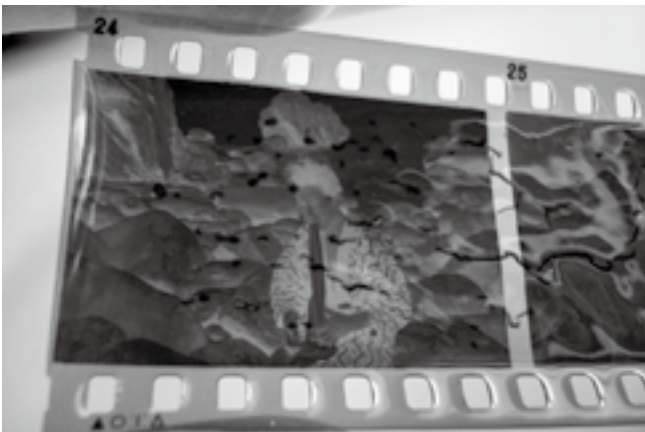
調査活動



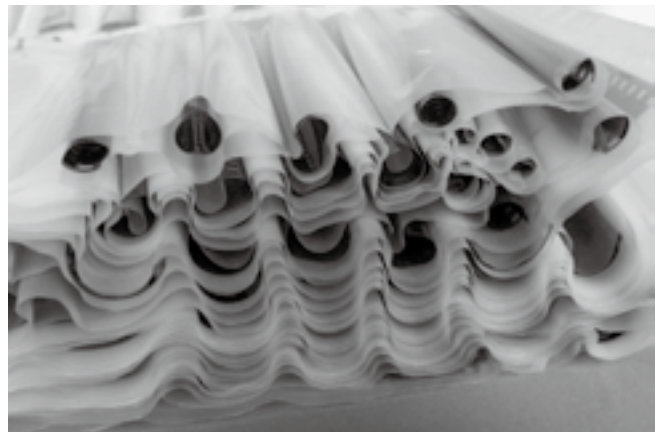
訪問調査



4×5インチフィルムの劣化



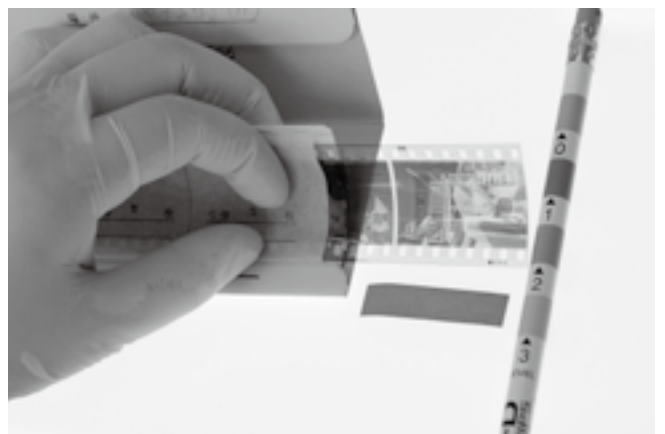
ビネガーシンドロームの劣化フィルム



カーリングしたフィルム



遺族宅にて 契約書の説明



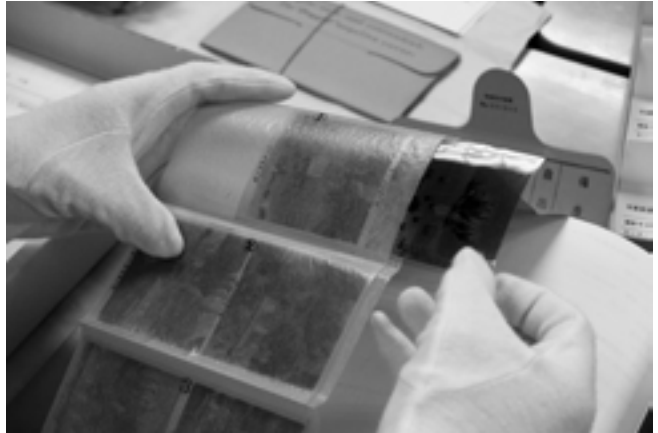
A-Dストリップで酸性劣化度を調べる

収集した原板は日本写真家協会内の作業室で、フィルムの劣化の有無を確認し、画像確認のためのスキャンニングとコンタクトプリントを制作したのち、中性紙ホルダーへ交換し東京国立近代美術館のフィルムセンターの収蔵庫（室温10℃、湿度40%）で保存します。

整理作業



コンタクトプリントとの照合



フィルム整理



フィルムのスキャン



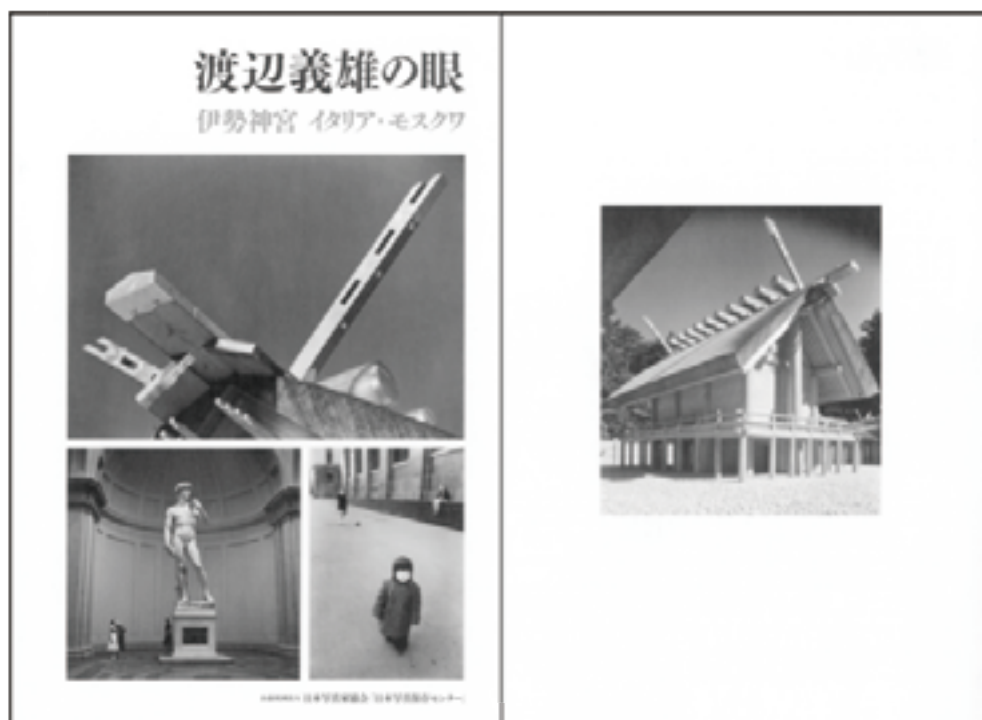
35mmフィルム用中性紙ホルダー



相模原のフィルム収蔵施設



2013年から写真原板を収蔵



写真展「渡辺義雄の眼 伊勢神宮 イタリア・モスクワ」図録



渡辺義雄 旅に出る母子 モスクワ 1956年



渡辺義雄 恋人と フィレンツェ 1956年



渡辺義雄 内宮正殿正面屋根と空 1993年



渡辺義雄 内宮正殿北面全景 1993年



緑川洋一 「白い村—ある石灰工場の記録」 東宇和 1954年



緑川洋一 島の分教場 下津井沖 1955年ごろ



野水正朔 『淡国写真帖』 子守うた 三原郡内 1953年



緑川洋一 「おちよろ舟」 大崎、上島 1957年



野水正朔 『淡国写真帖』 干しダコ 淡路町 1966年



野水正朔 『淡国写真帖』 海の国道 南淡町 1954年



岩宮武二 『佐渡』腕白小僧 琴浦 1954年ごろ



岩宮武二 『佐渡』竹細工 小木町 1954年ごろ



山崎治雄 建設中の旭川ダム 岡山県 1952年ごろ



岩宮武二 『佐渡』世間話 小川 1954年ごろ



山崎治雄 村落の表情 岡山県 1950年ごろ



山崎治雄 栃原地区水没 橋の上の女性 岡山県 1950年ごろ



佐藤元洋 「反戦運動'68」東京 1968年



佐藤元洋 「反戦運動'68」東京 1968年



若目田幸平 『東京のちょっと昔』町屋 1975年



若目田幸平 『東京のちょっと昔』町屋 1975年



page2017 発表風景



page2017 展示風景

禁無断転載

平成28年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
報告書

平成29年3月 公益社団法人日本写真家協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIIビル

TEL:03-3265-7451 FAX:03-3265-7460

<http://www.jps.gr.jp>

E-mail: info@jps.gr.jp